バカとテストと虚空の使者

SHOW

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
バカとテストと虚空の使者

【Ｎコード】
Ｎ９０５２Ｑ

【作者名】
ＳＨＯＷ

【あらすじ】
霊帝ケイサル・エフィスを撃破し、幾多の並行世界を渡り歩く存在・・・・・・・
「虚空の使者」となったクォヴレー・ゴードン。数多くの並行世界を渡り彼が新たに辿り着いた世界は・・・「バカとテストと召喚獣」の世界！！！？
スパロボとバカテスのクロスオーバー小説「バカとテストと虚空の使者」始まります！！！！！

※基本原作沿いですが最近壊れがち（汗）

プロローグ（前書き）

はじめまして、ＳＨＯＷ太０５３１と申します。
いきなりご都合主義全開です。
あたたかい目でみてください。

プロローグ

～クォヴレーｓｉｄｅ～

目覚めると、そこは見慣れたコックピットではなくベッドの上だった。

ク「ここは・・・何処だ？」

周りを見渡す、学習机にノート筆記用具に参考書、そして目覚まし時計がある。

7時か、アラームをセットしていないようだ。

その他には小さな丸テーブルの上にノートパソコンが置いてあり、さらに見渡すと着替えが入っているのであろう小さなタンスを見て自分の服装を確認するが・・・

ク「パイロットスーツじゃないだと・・・！？」

いつも着ているパイロットスーツではなく、黒のタンクトップに白のジャージ姿だった。

ク「いったい誰が・・・？」

疑問に思いつつもベッドから起き上がり身体を伸ばす。

ミシミシと骨が音を立てる。どうやらかなり眠っていたようだ。

カーテンを開け、外を見る。晴天だ。どうやらこの部屋は二階にあるようだ。ベランダに出て外を見渡す。表札を見る限りではここは日本の住宅街のようだ。

だが確認すべきはそこではない、重要なのは・・・

ク「ここはどんな世界か・・・だな」

そう、早急に確認すべき事はここが『どんな世界であるか』、ということだ。

今まで渡ってきた世界には必ずといっていいほど戦いがあった。故に新しい世界に転移したらすぐに情報を集める。

部屋に戻りノートパソコンを起動し、ネットワークに接続しようとして、メールが一件受信されているのを確認した。差出人を見て俺は驚愕した。

ク「バカな！！アストラナガンからだと！！？」

俺の相棒ディス・アストラナガンからこの世界の情報と転移の原因が書いてあった。

この世界にはバルマーは存在せず、ＰＴのような起動兵器もない。平和な並行世界の一つで、今まで渡ってきた世界の仲間達が俺に一時でも平和な日常生活を送らせたいと言う願いが強大な意思の力を発生させ、それに飛ばされてこの世界に来たらしい。

世界を越えてまで届けられた仲間達の強い想いに改めて仲間達に感謝した。

ク「ありがとう、みんな。みんなが連れて来てくれたこの世界で、少し羽を休めるとするよ」

戦う事が無いためアストラナガンは異次元で待機するようだ。

生活するにあたり必要なものは全て揃っているらしい。

その後、家の構造を把握したりして時間を潰しているとインターホンが鳴った。

時計を見る、１０時過ぎだ。人が訪ねて来てもおかしくはない。

玄関に向かいドアを開けると、紙袋を持った初老の男性が立っていた。

男性「クォヴレー・ゴードン君ですね？はじめまして、私は文月学園の教師の福原慎と申します」

そう言いながら男性は名刺を差し出してきた。どうやら本当のようだ。

ク「それで、いったいどういったご用件でしょうか？」

福「君が転入する我が文月学園の資料と制服等を持って参りました」

ク「・・・・・・は？」

こうして俺の学園生活が始まりを告げた。

プロローグ（後書き）

感想、誤字脱字、ご意見宜しくお願いします。
学生身分のため更新は不定期になります。

３／２５　少し読みやすくしました

１０／１２　大改変

「この世界」におけるクォヴレー・ゴードン　要するに設定（前書き）

設定です。
またご都合主義全開・・・
飽きられませんように（＞人＜；）！！

「この世界」におけるクォヴレー・ゴードン　要するに設定

クォヴレー・ゴードン

来歴

ドイツ出身、幼い頃両親を亡くし孤児院に引き取られる。
成長するにつれ、様々な知識、技術を吸収。
その才能を燻らせるのを良しとしない現後見人に
引き取られ本格的に勉強を始める。
「世界を見てこい。特に日本の和食は美味いぞ。なんてったって（ｒｙ」
の一言で文月学園に2年間の留学が決定したが、
本人にその事を後見人が伝え忘れていた模様。
因みに後見人の名はかの世界的有名競走馬「トロンベ」
の馬主であり、世界中に店舗展開している高級料理店
「キッチン・ザ・クロガネ」のオーナーでもある男
「レーツェル・ファインシュメッカー」である。

学力

際限なく伸び続けているが、現在は学年主席の座を
十分狙う事ができるくらい高い。
得意科目は数学　、英語、理科系全般
苦手科目は無いに等しいが現国が他と比べ低い
（心理描写が苦手のようだ）

特技

刺繍、料理、７ヶ国（日、英、中、独、仏、伊、露）

所属クラス

Ｆクラス（振り分け試験に引っ越しが間に合わず）

「この世界」におけるクォヴレー・ゴードン　要するに設定（後書き）

基本スペックはサルファを参照
いろいろやらかします。
バカテストはクォヴレーの代わりに
特別ゲストの珍回答を載せようと思います。
感想、誤字脱字、御指摘のほう宜しくお願いします。

第一問　新たな出会い（前書き）

やっと書けました。
この話から本編です。

２／１９　修正しました。
３／２７　再修正

第一問　新たな出会い

【第一問】

『調理の為に火にかける鍋を制作する際、重量が軽いのでマグネシウムを材料に選んだのだが、調理を始めると問題が発生した。この時の問題点とマグネシウムの代わりに用いるべき金属合金の例を一つ挙げなさい。』

姫路瑞希、クォヴレー・ゴードンの答え

『問題点・・・マグネシウムは炎にかけると激しく酸素と反応する為危険であるという点。

合金の例・・・ジュラルミン』

教師のコメント

正解です。合金なので『鉄』では駄目という引っ掛け問題なのですが、二人とも引っかかりませんでしたね。

土屋康太の答え

『問題点・・・ガス代を払っていなかったこと』

教師のコメント

そこは問題じゃありません。

吉井明久の答え

『合金の例・・・未来合金←すごく強い』

教師のコメント

すごく強いと言われても。

ゲスト解答者リュウセイ・ダテの答え
『問題点・・・火が強すぎた点
合金の例・・・超合金Z←ものすごく強い』
教師のコメント
鍋を作るのになんてモノ使うんですか。

クォヴレーside

俺が転移して「この世界」に来て数日、この辺りの地理も把握し、不自由はしなくなった。

今俺は学園の校舎に続く坂道を歩いている。道の両脇には見事な桜が咲き誇っており、今までしみじみと見たことは無かったので少しの間足を止め見入ってしまっていたが、背中に吹いてきたそよ風に急かされるように再び歩きだした。

校門を通り玄関に着くと、腕組みして立っている男がいる。ここの教師なのだろう。

「む、お前が転入生だな？」

こちらに気がついたようで、話しかけてきた。日焼けした浅黒い肌をしている。保健体育の教師だろうか？

ク「はい、クォヴレー・ゴードンです。正確には留学生だと思いますが・・・」

「それもそうだな。俺は『おはようございます鉄じーーじゃなくて西村先生』・・・」

教師の声を遮った声の方を見ると、男子生徒が一人立っていた。

～ｓｉｄｅｏｕｔ～

～明久ｓｉｄｅ～

やってしまった。まさか寝坊してしまうとは。だがそんなことよりも今僕の頭は新しいクラスのことで一杯なのだ。

玄関に着くと鉄人（西村先生）が立っていた。このまま挨拶なしでいったら後が恐い。なんてったって生活指導の鬼、鉄人だ。意を決して挨拶する。

明久「おはようございます鉄じーーじゃなくて西村先生」

鉄人「吉井、遅刻だぞ。あと鉄人って言わなかったか？」

明久「ははっ。気のせいですよ。

鉄人「ん、そうか？」

ふう、危ない。ばれなかったようだ。ちなみに鉄人というのは生徒の間での西村先生の渾名でーーー

「西村先生、彼は・・・？」

鉄人「ん、ああ、コイツはタダのバカだ」

明久「いきなりバカ呼ばわりされた？って、あれ？」

今まで気づかなかった。鉄人に隠れて見えなかったけど、銀髪の美人が立っていた。でもなんで男子の制服着てるんだろう？

～ｓｉｄｅｏｕｔ～

～クォヴレーｓｉｄｅ～

男子生徒と西村教諭が話し始めた。どうやら吉井という生徒らしいが・・・ちょうど話に区切りついたようだがまだこちらには気づいて無いようだ。

ク「西村先生、彼は・・・？」

鉄人「ん、ああ、コイツはタダのバカだ」

いきなりバカ呼ばわりした。

呆れたような表情をしているあたり、かなりの問題児のようだ。そのようには見えないのだが・・・

明久「いきなりバカ呼ばわりされた？って、あれ？」

どうやらこちらに気づいたようだ。挨拶しておくか。

ク「はじめまして、転入生のクォヴレー・ゴードンだ。君は・・・バカでいいのか？」

明久「初対面の人にまでバカ呼ばわりされた！！！」

鉄人「仕方がないだろう。お前は正真正銘のバカだからな」

バカ「正真正銘とは酷すぎる！！って、いつの間にか僕の表記までバカに変わってる！！？」

鉄人「そんなことよりお前も挨拶をしないか」

明久「そんなことって・・・、あ、僕は吉井明久だよ。よろしくね。ゴードンさん」

ク「ああ、よろしくたのむ」

そう言って互いに握手をする。いい友人になれる気がしてきた。

・・・さん付けは解せんが。

明久「ところで先生、僕のクラスは？」

鉄人「ああ、コレだ。受け取れ」

明久「あ、どーもです」

そう言って箱から封筒を取り出し、吉井がそれを受け取る。

中に入っている紙に所属するクラスが書いてあるようだ。

鉄人「一応言っておくが、ゴードンは引っ越しが間に合わず試験を受けていない為に、Ｆクラスに強制的に入ってもらう」

明久「へぇ～、大変だね。ゴードンさん」

封筒を破りながら吉井が言う。あの顔はよほど自信があるのだろう。

鉄人「そして吉井、もう一度お前に言う事がある」

ク「（・・・もう一度？）」

何か重要な事を言ってたかを考えてる内に吉井が紙を取り出して、開いていた。

そこにはこう書かれていた。

『吉井明久・・・・・・Ｆクラス』

鉄人「お前は正真正銘のバカだ」

～ｓｉｄｅｏｕｔ～

第一問　新たな出会い（後書き）

やっと本編です。ちょいちょい文章がオリジナルです。
ゲスト解答者は主にＯＧキャラにしようと思います。
感想、御意見、誤字脱字報告
よろしくお願いします。

第二問　引き金～Aパート～（前書き）

えー、テスト勉強と課外学習の為に、更新できませんでした。
とりあえず今回は2部構成にしたいと思います。
お待ちいただいた方々、本当スンマセンでしたぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ
！！！！！！

第二問　引き金～Aパート～

【第二問】
以下の意味を持つことわざを答えなさい。
『1．得意なことでも失敗してしまうこと』
『2．悪いことがあった上に更に悪いことが起きる喩え』

姫路瑞希の答え
『（1）弘法にも筆の誤り』
『（2）泣きっ面に蜂』

クォヴレー・ゴードンの答え
『（1）河童の川流れ』
『（2）踏んだり蹴ったり』

教師のコメント
正解です。他にも（1）なら『猿も木から落ちる』、（2）なら『弱り目に祟り目』などがありますね。

土屋康太の答え
『（1）弘法の川流れ』

教師のコメント
シュールな光景ですね。

吉井明久の答え
『（2）泣きっ面蹴ったり』

教師のコメント

君は鬼ですか。

ゲスト解答者　タスク・シングウジの答え
『（2）レオナちゃんの料理にクスハ汁』

教師のコメント
君は悪魔ですか。

～クォヴレーｓｉｄｅ～

今俺は担任の福原先生に連れられてＦクラスに向かっている。吉井？ああ、彼とは校舎に入ってすぐに別れた。真っ直ぐ教室に向かっていったようだ。俺は西村教諭に言われて職員室に向かったからな。

・・・渾名で呼ばないのかって？いや、教師を渾名で呼ぶのは失礼だろ、常識的に。

ふと、視界に二年Ａ組と書かれたプレートが見えたので教室に目を向ける。

・・・何だこの広さは？学習塾と言った方がいい位だ。

先生に着いていかなければいけないのでチラッとだけしか見れなかったが設備の豪華さが伺える。プラズマディスプレイにリクライニングシートそれにノートパソコンか。学習環境としては文句を言った奴の気が知れない位過剰だ。

文月学園には幾つも企業がスポンサーとして着いている為、この様な設備をあれだけの学費で維持できるのだろう。

そんなこと考えている内にFクラスに着いたよう・・・だ・・・が・・・・・・・

ク「・・・本当に教室なのか？」

外見を見ただけで教室の中を見てないが、いっそ物置と言った方が説得力がある。だが、学習環境ぐらい最低限整っている筈だ。

福原「では、呼びましたら入ってきてください」

ク「わかりました」

そう言って先生は教室に入っていく。少し教室の中が見えたが、まさか畳に卓袱台とはな・・・。

『えー、おはようございます。二年F組担任の福原慎です。よろしくお願いします。早速ですが、転入生を紹介します。入ってきてください』

ん、もう入るのか。少し緊張するな。

ドアを開け教室に入り、先生の隣に立つ。男子が多いな。

福原「えー、彼が転入生です。自己紹介をお願いします」

先生に促され、自己紹介をする。

ク「クォヴレー・ゴードンだ。よろしくたのむ（ニコッ」

・・・数人の男子の顔が赤くなった。風邪か？

～ｓｉｄｅｏｕｔ～

～明久ｓｉｄｅ～

少し時間は遡り・・・

僕は今教室の前にいる。

ゴードンさんとは校舎に入ってすぐに別れてしまった。綺麗な人だったなぁ。なんで男子の制服なんか着ていたんだろ？っと今は教室に入らないと　。遅刻した奴を罵倒する程酷い先生は玄関でもう会っているしね。

明久「すいません、ちょっと遅れちゃいましたっ♪」

「早く座れ、このウジ虫野郎」

いきなりひどっ！！！！！！

「聞こえないのか？あぁ？」

いくらなんでも失礼な！！一体誰だ！！！って・・・

明久「・・・・・・雄二、何やってんの？」

教壇に立っていたのは僕の悪友、坂本雄二だ。

雄二「先生が遅れてるらしいから、代わりに教壇に上がってみた」

明久「なんで雄二が？」

雄二「一応このクラスの最高成績者だからな」

明久「え？それじゃあ雄二がこのクラスの代表？」

雄二「ああ、そうだ」

ニヤリと雄二が笑う。このクラスを動かすには雄二を説得するだけで良いってことだ。

雄二「これでこのクラスの全員が俺の兵隊だな」

ふんぞり返って床に座っているクラスメイトたちを見下ろす雄二。なんで床に座って・・・え？もう知ってる？床じゃなくて畳だってことも？

福原「えーとちょっと通してもらえますか？」

不意に背後から覇気のない声が聞こえてきた。

そこにはいかにも冴えない風体のオジサンがいた。

福原「それと席に着いてもらえますか？ＨＲ（ホームルーム）を始めますので」

どうやらこの人が担任の先生みたいだね。

明久「はい、わかりました」

雄二「うーっす」

僕と雄二はそれぞれ返事をしてそこらの席（？）に着く。先生は僕らを待ってから壇上でゆっくりと口を開いた。

福原「えー、おはようございます。二年Ｆ組担任の福原慎です。よろしくお願いします。早速ですが、転入生を紹介します。入ってきてください」

あ、ゴードンさんだ。やっぱり綺麗だなぁ。

福原「えー、彼が転入生です。自己紹介をお願いします」

・・・ん？彼？・・・え？ウソ！？

ク「クォヴレー・ゴードンだ。よろしくたのむ（ニコッ」

・・・男子だったのぉぉぉぉぉぉぉぉぉ！！！！！！！？

～ｓｉｄｅｏｕｔ～

第二問　引き金～Ａパート～（後書き）

普通こういうのは前書きでいうことなんですけど、
ＰＶ３５００突破・ユニーク１０００突破いたしました。
ムラサメさん！！感想ありがとうございます！！
次の話も出来るだけ早く書きますので、
感想・誤字指摘よろしくお願いします。

第二問　引き金～Bパート～（前書き）

やっと書けた・・・

お待ちになっていただいた読者の皆様

本当にスイマセン

後がきで皆さんに聞きたいことがありますので

最後まで見てください

ではどうぞ～

第二問　引き金～Bパート～

クォヴレーside

まあ、自己紹介をしたわけだが・・・

『はい！質問です！！！』

いきなりか。

ク「何だ？」

『なんで男子の制服なんですか？』

・・・さすがにこんな質問がくるとは思わなかったな。

というか、俺は女子だと思われていたのか。

ク「俺は男なんだが・・・」

『『『『何ィィィィィ！！！！！！！！』』』』

そんなに驚くか。

『バカな！！銀髪の美女にしか見えん！！』

『まさか秀吉と同じ性別か！！？』

『いや、まて。秀吉はカワイイ系だが、奴は美人系だ』

『・・・・・・新商品の予感』

色々と会話が飛び交うが意味がさっぱりわからん。

ク「とにかく、よろしくたのむ」

そう言って空いている席に着く。
その後設備の確認があったが、不備しかないだろう。
しかも、極力自力でなんとかするしかないようだ。
先生もなんだかんだで我慢するように言っている。

福原「それでは、自己紹介でもしましょうか。廊下側の人からお願いします」

クラスメイトの自己紹介が始まったか。まだ顔しかわからんからな。
どんな人間かしっかり
見ておくべきだな。

秀吉「木下秀吉じゃ。演劇部に所属しておる」

木下秀吉か・・・中性的な顔立ちだが、制服を見る限り男子だろうな。女装をしていたら普通に女子として通用するだろう。

秀吉「ーーと、いうわけじゃ。今年一年よろしくたのむぞい（ニコッ」

・・・だから何故顔を赤らめるんだ？お前たちは？

土屋「・・・土屋康太」

ふむ、土屋康太か・・・細身だが、かなり鍛えているようだ。
それに動きに無駄がない上にスキが無い。この世界には『スクール』
は無いハズだが・・・

島田「島田美波です。海外育ちで、日本語は会話はできるけど読み
書きが苦手です」

ん？女子か・・・島田美波か。
女子とは珍しいじゃないか？

島田「あ、でも英語も苦手です。育ちはドイツだったので」

ドイツ育ちか、一応同郷になるのだな。

島田「趣味は吉井明久を殴ることです☆」

・・・恐ろしくピンポイントな趣味だな。笑顔で手を振っても吉井
は半分青ざめているぞ？

後は淡々と名前をいうだけの自己紹介が続いたのだが

明久「吉井明久です。気軽に『ダーリン』って呼んでくださいね♪」

『『『『ダァァーーリィーーン！！』』』』

・・・不愉快だなこれは。が、穿った見方をすれば
かなりまとまりやすい集団だ。
・・・甲児や豹馬とかは多分一緒に叫んでただろうな。
というか吉井、吐きそうになるくらいならやらないほうが

良かったんじゃないか？

ーーー自己紹介もかなり進んだくらいで、不意に教室のドアが開いた。走って来たのだろうか息を切らせた女子生徒が立っていた。

「あの、遅れて、すいま、せん・・・」

『えっ？』

驚いたような声が上がった。そんなに驚くことなのか？

福原「丁度よかったです。今自己紹介をしているところなので姫路さんもお願いします」

姫路「は、はい！　？あの、姫路瑞希といいます。よろしくお願いします・・・」

ふむ、姫路瑞希か・・・小動物のような雰囲気があるな。

「はいっ！質問です！」

またか。

姫路「あ、は、はいっ。なんですか？」

「なんでここにいるんですか？」

・・・質問の意図が解らないが、

恐らく彼女は、本来ここにくる筈がない生徒

だったのだろう。
クラス全体が動揺しているくらいだからな。
姫路「そ、その・・・振り分け試験の最中、高熱を出してしまいまして・・・」
成る程、合点がいった。途中退席で無得点扱い
となったようだ。
それを聞いてちらほらと言い訳の声が上がる。
『そういえば俺も熱（の問題）が出たせいでＦクラスに』
『ああ。科学だろ？アレは難しかったな』
『俺は弟が事故に遭ったと聞いて実力を出し切れなくて』
『黙れ一人っ子』
『前の晩、彼女が寝かせてくれなくて』
『今年一番の大嘘をありがとう』
・・・大丈夫か？このクラス。
姫路「で、ではっ、一年間よろしくお願いしますっ！」
そう言って逃げるように吉井と坂本の間の
卓袱台に着き、
姫路「き、緊張しました～・・・」

卓袱台に突っ伏した。

吉井「あのさ、姫「姫路」」

姫路に話しかけようとした吉井にかぶせる
ように坂本が声をかける。
吉井は悔しそうだ。

「は、はいっ。なんですか？えーっと・・・」

慌てて坂本の方に身体を向け、
スカートの裾を正す姫路。

雄二「坂本だ。坂本雄二。よろしくたのむ」

姫路「あ、姫路です。よろしくお願いします」

深々と頭を下げる姫路。育ちの良さが伺える。

雄二「ところで、姫路の体調は未だに悪いのか？」

吉井「あ、それは僕も気になる」

吉井が口を挟む。確かに気になるな。

姫路「よ、吉井君！？」

吉井の顔を見て驚く姫路。本気で驚いているようだ。

雄二「姫路、明久がブサイクですまん」

いや、驚いたのはそこではないだろう。

姫路「そ、そんな！目もパッチリしてるし、顔のラインも細くて綺麗だし、全然ブサイクなんかじゃないですよ！その、むしろ・・・」

雄二「そう言われると、確かに見てくれは悪くない顔をしているかもしれないな。俺の知人にも明久に興味を持っている奴がいたような気もするし」

ほう。吉井は存外モテるようだな。

明久「え？それは誰「そ、それって誰ですかっ！？」」

吉井の台詞が姫路によって遮られる。

というか今日吉井は台詞を取られっぱなしじゃないか？

雄二「確か久保ーーー利光だったかな？」

・・・名前の響きから察するに男子か？

明久「・・・・・・・・・・・・・・・ｏｒｚ」

雄二「おい明久。声を殺してさめざめと泣くな」

・・・かけてやる言葉が無いな。

雄二「半分冗談だ。安心しろ」

明久「え？残り半分は？」

雄二「ところで姫路。体は大丈夫なのか？」

姫路「あ、はい。もうすっかり平気です」

明久「ねぇ雄二！残りの半分は！？」

無視されたからか、吉井が声を大きくする。

福原「はいはい。そこの人たち、静かにしてくださいね」

先生が教卓を叩いて注意してきた。

明久「あ、すいませ『バキイッバラバラバラ・・・』」

突如、教卓が崩れ落ちる。軽く叩いただけでこれか・・・

福原「え～・・・替えを用意してきます。少し待っていてください」

そう言って先生は教室を出て行った。教師用の
設備ですらこのザマか。

姫路「あ、あはは・・・」

それを見て姫路が苦笑いをしている。
ふと、吉井が坂本を連れて廊下に出て行った。
その時の吉井の眼は何かを決意した眼だった。
・・・あの眼を見ると皆を思い出すな。

姫路「あ、あの～、あ、貴方は・・・？」

そういえば自己紹介の時にはいなかったな。

ク「俺は転入生のクォヴレー・ゴードンだ。よろしくたのむ」

姫路「はい。よろしくお願いしますね」

丁度吉井たちも戻ってきたみたいだな。
先生も替えの教卓を持ってきたので
自己紹介が再開する。

特に何も無く俺の番まできた。

福原「次は、ゴードン君ですね。とりあえずもう一度お願いできますか？」

ク「わかりました」

特に断る理由も無い。確認の意も
含めてもう一度自己紹介をすべく立ち上がる。

ク「さっきも言ったが、転入生のクォヴレー・ゴードンだ。俺のことはクォヴレーで構わない。今年一年よろしくたのむ」

そう言って再び座る。
・・・しかし正座は疲れるな。

※クォヴレーは今までずっと正座でした。ｂｙ作者

・・・なんだ？変な電波が・・・気のせいか？

福原「坂本君、君が自己紹介最後の一人ですよ」

雄二「了解」

先生に呼ばれ、坂本が教卓に向かう

福原「坂本君はFクラスのクラス代表でしたよね？」

先生に問われ、頷く坂本。
そして教壇に上がり口を開いた。

雄二「Fクラス代表の坂本雄二だ。俺のことは代表でも坂本でも、
好きなように呼んでくれ」

代表、つまりこのクラスの最高成績者だが、
注目する生徒は少ない。
確かにこのクラスでは代表でも五十歩百歩
と言ったところだろう。

雄二「さて、皆に一つ聞きたい」

その言葉に生徒が坂本に視線を向ける。
間の取り方が上手いな。すぐに視線が
集まったようだ。
それを確認した後、坂本は自身の視線を動かす。
視線の先にはこのクラスの、最低限以下とも
言える備品の数々。

雄二「Aクラスは冷暖房完備の上、座席はリクライニングシートらしいがーーー」

一呼吸おき、静かに告げる。

雄二「ーーー不満はないか？」

『『『大ありじゃぁっ！！』』』

またぴったりハモったな。

雄二「だろう？俺だってこの現状は大いに不満だ。代表として問題意識を抱いている」

『そうだそうだ！』

『いくら学費が安いからと言って、この設備はあんまりだ！改善を要求する！』

『そもそもAクラスだって同じ学費だろ？あまりにも差が大きすぎる！』

堰を切ったかのように次々と不満の声が上がる。

雄二「みんなの意見もっともだ。そこで」

その反応に満足したかのように不敵な笑みを浮かべーーー

雄二「これは代表としての提案だがーーー」

戦友となる仲間に野生的な八重歯を見せ、
Ｆクラス代表　坂本雄二はーーー
雄二「ーーー俺たちＦクラスはＡクラスに『試験召喚戦争』を仕掛けようと思う」
ーーー引き金を、引いた。

オマケ

姫路「クォヴレーさんは、何で男子の制服なんですか？」
クォヴ「・・・俺は男だ」
姫路「え、えええぇぇぇ！！！？」
・・・そんなに女っぽく見えるのか？

第二問　引き金～Bパート～（後書き）

というわけで、聞きたいことですが、
今後の展開で、

「クォヴレーにヒロインが必要かどうか」

「必要ならば、原作キャラか、オリキャラか」

この二点について聞きたいと思います。

注意事項として、この作品内では

「木下秀吉は男」

となっておりますので
『秀吉はヒロイン対象外』です。

また、サルファのキャラの場合、
『限り無く本人に近い別人』
となります。

ヒロインが必要なら？とヒロインの名前を、
不必要なら？と書いてください。

感想にて受け付けますので
よろしくお願いします。

ついでに感想もいただけるとありがたいです。

期限は３／３１までにします。

第三問　戦力分析（インターミッション）（前書き）

割と早く書けたお！！

第三問　戦力分析（インターミッション）

【第３問】

問　以下の英文を訳しなさい

『Ｔｈｉｓ ｉｓ ｔｈｅ ｂｏｏｋｓｈｅｌｆ ｔｈａｔ ｍｙ ｇｒａｎｄｍｏｔｈｅｒ ｈａｄ ｕｓｅｄ ｒｅｇｕｌａｒｌｙ.』

姫路瑞希＆ａｍｐ；クォヴレー・ゴードンの答え

『これは私の祖母が愛用していた本棚です。』

教師のコメント

正解です。きちんと勉強していますね。

土屋康太の答え

『これは

』

教師のコメント

訳せたのはＴｈｉｓだけですか。

吉井明久の答え

『☆●◆▽「♪＊×』

教師のコメント

できれば地球上の言語で。

ゲスト解答者アクセル・アルマーの答え（アホセル）

『これは俺のバアさんが使ってた本棚なんだな、これが。』

教師のコメント
もう少し正確に訳してください。

クォヴレーｓｉｄｅ

代表が言ったＡクラスへの宣戦布告
それは無謀ともいえる提案だ。

『勝てるわけがない』

『これ以上設備を落とされるなんていやだ』

『姫路さんがいたら何もいらない』

そんな声が生徒たちから上がる。
・・・最後のは違う気がするが気にしたらキリがなさそうだ。
雄二「そんなことはない。必ず勝てる。いや、俺が勝たせてみせる」
圧倒的戦力差を理解しながら坂本は宣言した。

『何を馬鹿なことを』

『できるわけないだろう』

『何の根拠があってそんなことを』

確かに何の根拠もなしにこのようなことを言うことはないだろう。

雄二「根拠ならあるさ。このクラスには試験召喚戦争で勝つことのできる要素が揃っている。それを今から説明してやる」

ふと隣に気配を感じ視線を向けると

ク「・・・土屋、何をやっているんだ？」

土屋「・・・・・・・！！（ブンブン）」

姫路「は、はわっ」

土屋が畳に顔をつけて姫路のスカートを覗いていた。

あそこまで大胆に覗くこと自体驚くが、それよりも気配を殺すのが上手すぎる。

雄二「土屋康太。こいつがあの有名な寡黙（ムッツリーニ）なる性識者だ」

土屋（以降ム）「・・・・・・・！！（ブンブン）」

途端にクラスがざわめく。

『ムッツリーニだと・・・？』

『馬鹿な、ヤツがそうだというのか・・・？』

『だが見ろ。あそこまで明らかな覗きの証拠未だに隠そうとしているぞ・・・』

『ああ。ムッツリの名に恥ない姿だ・・・』

あそこまで気配を殺してまで覗くヤツがいるとは思わなかった。

雄二「姫路のことは説明する必要もないだろう。皆だってその力はよく知っているはずだ」

姫路「えっ？わ、私ですかっ？」

雄二「ああ。ウチの主戦力だ。期待している」

やはり彼女のスペックは高いようだ。

主戦力と言われるくらいなのだから相当な学力があるということなのだろう。

『そうだ。俺たちには姫路さんがいるんだった』

『彼女ならAクラスにも引けをとらない』

『ああ。彼女さえいれば何もいらないな』

最後のはスルーしよう。

Aクラス並の実力ならば申し分ない。

雄二「木下秀吉だっている」

彼も戦力なのか。

『おお・・・！』

『ああ。アイツ確か、木下優子の・・・』

雄二「当然俺も全力を尽くす」

彼は代表だからな。

姫路という例外がいるとはいえ、このクラスのトップだからな。

『確かになんだかやってくれそうな奴だ』

『坂本って、小学校の頃は神童とか呼ばれていなかったか？』

『それじゃあ、振り分け試験の時は姫路さんと同じく体調不良だったのか』

『実力はAクラスレベルが二人もいるってことだよな！』

士気は確実に上がった。

やる気は十分だな。

雄二「それに、吉井明久だっている」

・・・シンーーーーー

一気に下がったな。

明久「ちょっと雄二！どうしてそこで僕の名前を呼ぶのさ！全くそ

んな必要はないよね！」

『誰だよ、吉井明久って』

『聞いたことないぞ』

明久「ホラ！折角上がりかけてた士気に翳りが見えてるし！僕は雄二たちとは違って普通の人間なんだから普通の扱いをーーーって、なんで僕を睨むの？士気が下がったのは僕のせいじゃないでしょう！」

吉井のいう通りだが何か考えがあるのだろう。

そうでなくてはこれはマイナスだからな。

雄二「そうか。知らないようなら教えてやる。こいつの肩書きは《観察処分者》だ」

観察処分者か・・・

こちらの世界に転移してすぐに先生から受けた説明にそんなものがあった気がするが・・・

・・・思いだした。

確か物理干渉が本来不可能な召喚獣を特別に物理干渉を可能にした召喚獣を召喚できるのだが、制約が多いため便利ではない。

痛みや疲れといった負担が召喚獣にかかると召喚者にフィードバックされるため実質的には罰だ。

しかし、召喚獣を操る機会が非常に多い・・・そうか。成る程そういうことか」

雄二「・・・説明どうも」

ん？いつの間にか声にだしていたようだ。

明久「ありがとう！クボレー！！僕の名誉は守られた！！」

ク「・・・クォヴレーだ」

だがしかしこの肩書きは特に問題児とみなされた生徒にしかつけられない不名誉な肩書きだがな・・・む、どうした吉井？」

実は今のは意図的にだした。

さっきとは打って変わって沈んでいる。

雄二「クォヴレーのいう通り、コイツは召喚獣の操作が上手いだけのザコだ」

坂本が止めを刺した。

雄二「ところでクォヴレー、お前の実力を知っておきたいのだが、何かないか？」

必要なことだな。

しかし何もーーー

福原「ありますよ」

今まで空気だった福原先生が突然切り出した。

ああ、そういえばあった。

福原「実はクォヴレー君には引っ越しが終わったあとに学力調査の為のテストを受けてもらっています。内容は振り分け試験と同じですが、あくまで調査の為のテストでしたので、クラスに変更がなかったのですが・・・」

雄二「それで、何点だったんスか？」

俺も気になる。

あのテスト形式は初めてだったしな。

福原「総合得点で６９７２点です。特に英語では８００点台をマークしています」

ふむ、そんなもんか。

『『『『『・・・・・・はあああああああああああああぁぁぁぁぁーーーーー！！！！！？』』』』』

うるさいな。

雄二「こいつは、ククッ、嬉しい誤算だな」

姫路「クォヴレーさん凄いです！！！」

明久「・・・・・・（あんぐり）」

坂本は嬉しそうに笑い、姫路は尊敬の眼差しをむけ、吉井はボーゼンとしている。

雄二「お前等・・・わかったな・・・」

『『『これで勝つる！！！！』』』

雄二「さあ、全員筆（ペン）を取れ！！出陣の準備だ！！！！」

『『『おおおーーーーーっ！！』』』

雄二「まずはDクラスを攻めるぞ！！明久！！宣戦布告してこい！！！」

明久「了解！！やぁーーってやるぜぇーーーー！！！！」

ノリとテンションでここまで坂本に誘導されているのに気がついた奴はいないだろうな。

数分後、ボロボロの吉井が帰ってきた。

第三問　戦力分析（インターミッション）（後書き）

作者「はい。今回からあとがきで特別コーナー、題して・・・

『放課後座談会ｉｎ文月学園Ｆクラス』

略して『放課後座談会』をはじめます～」

ク「クォヴレー・ゴードンだ」

明久「吉井明久で～す！！」

作者「主にこの三名でお送りしま～す」

明久「ラジオみたいだね」

作者「まあ、そんなノリ」

ク「そんなことより言うことがあるだろ」

作者「そうだった！！アンケートですが延長します！！４／１７まで受け付けます！！」

明久「前は期限書き忘れてたもんね～」

作者「・・・本当スイマセンｏｒｚ」

ク「感想もきてただろ」

作者「はい！！ＫＵＲＥＮＡＩ様、レイジングラ様、のらねこ様、感想ありがとうございます！！」

明久「のらねこ様から写真が届いて・・・って、これは！！！」

ク「どうした？」

作者「明久！！それをこっちによこせ！！」

ク「・・・なんだったんだ？」

作者「のらねこ様の書いていらっしゃる『銀魂～ＴＨＥ　ＧＵＮ　ＯＦ　ＤＩＳ～』に出てる女体化したクォヴレーがチャイナ服着てる写真」

ク「なっ！！？」

ム「・・・・・・物凄い売れ行き」

作者「おいおい、諭吉さんが２０人もいるよ」

ム「・・・・・・ムッツリ商会は坂田銀時氏に作者の地元の名物『長岡饅頭』と諭吉を１５人提供する」

作者「この饅頭はあんこたっぷりで甘いです」

明久「本当だ。おいし～♪」

ク「食べるのもいいが、時間だ」

作者「では次回も『バカとテストと虚空の使者』を」

三人「「「よろしくお願いしま～す（たのむ）」」」

アンケートは感想へお願いします。
内容は、クォヴレーのヒロインについてです。
必要なら？と書きヒロインの名前を、
不要なら？と書いてください！！

オリキャラ、サルファキャラ上等です！！！

呪・・・祝！！PV1万突破記念！！

作「祝！！1万PV突破記念！！Fクラス特別座談会！！」

「「「「イエーーーーーイ！！！！」」」」

作「はい！！作者デス！！」

ク「クォヴレー・ゴードンだ」

明久「吉井明久で～す！！」

ム「・・・土屋康太」

秀吉「木下秀吉じゃ」

雄二「坂本雄二だ。って作者、いきなりどうした？」

作「フッフッフ・・・聞いて驚け！！とうとうこの小説のPVが1万を突破したのだよ！！」

ク「こんな駄文でさらにロクに更新もしないクセにか？」

作「ひどっ！！！」

雄二「事実だ。悔しかったらサッサと更新しろ」

作「まあ、そうなんだけどさ」

明久「早く僕たちの活躍を書いてよね」

作「安心しろ。クォヴレー無双だ」

明久「ちょっと待てええええ！！僕の活躍は？僕が１番召喚獣を上手く操縦できるのに！！」

作「先に言っておく。ウチのクォヴレーはチートであると！！」

ク「どういことだ？」

作「そのうちお前は明久よりも召喚獣が上手く操縦できるようになる」

明久「じゃあ僕は！！！？」

雄二「ぶっちゃけ、途中からいらないな」

作「まだその時ではないが」

秀吉「どの位強いのじゃ？」

作「完璧に操縦できればウチのクォヴレーはＣクラスを単独で潰す」

明久「勝てるわけねーじゃんｏｒｚ」

雄二「オマケに容姿端麗、運動神経抜群、クール系ときたもんだ」

秀吉「ワシとしては、演劇部に欲しいのじゃがのう」

ム「・・・写真も売れている」

作「ああ、のらねこ様から貰ったアレ？」

ム「・・・秀吉を抜いて売り上げ1位」

ク「本当に何時の間に売ってたんだ？」

ム「・・・企業秘密」

明久「まさかこんなにもふつくしいとは」

作「まあ、2巻の話を楽しみにしてな」

ク「というより、これから先をどうする気だ？」

作「お楽しみというヤツなんだな、これが」

ク&雄「「じゃあ、サッサと書け！！」」

作「わかってますよ～「グーか？チョキか？」・・・スンマセン」

明久「ヒロインも早くって、作者！！まさか！！」

作「それはアンケート次第だ」

雄二「というか、この朴念仁・・・いや、フラグブレイカーが恋愛できんのか？」

ク「？？？」

作「そこは俺の腕次第だ！！！」

雄二「無理だ」

秀吉「無理じゃの」

明久「無理だね」

ム「・・・無理」

作「うがっ！！否定できない！！」

雄二「そこはする所だろうが」

ク「時間が近くなってきたぞ。駄作者はほっとけ」

作「クォヴレー酷い！！！」

秀吉「まあまあそのくらいにするのじゃ。さて、感想がきておったぞ。レイジングラ様からじゃ」

作「ありがとうございました！！！」

ム「・・・写真を1枚寄贈」

ク「勝手に渡すな！！」

作「感想、アンケート待ってます！！」

秀吉「制限は外れているからの。ジャンジャン頼むぞい」

明久「ではまた「次回で！！」ってちょっと雄二！！！」

ク「ところで次はいつだ？」

作「４／１８くらいにはしているはず」

ク「そうか。しっかり書け」

作「は～い」

呪・・・祝!!PV1万突破記念!!（後書き）

アンケート待ってます

４／１７までです

よろしくお願いします

第四問　ブリーフィング（前書き）

学校が始まったのでもっと不定期になります。

見捨てないでくださいｏｒｚ

第四問　ブリーフィング

～クォヴレーｓｉｄｅ～

前回のあらすじ
ボコボコになった吉井が帰ってきた。

明久「騙された！！」

雄二「いや、お前が勝手に突っ込んでっただけだ」

明久「・・・・・・あっ」

まあ、こうなるなって思わなかったからな（汗

姫路「吉井君、大丈夫ですか？」

ボロボロの吉井を見て姫路が声をかけた。
制服が破れている姿は痛々しいしな。

明久「あ、うん。大丈夫」

美波「ちょっと吉井、本当に大丈夫なの？」

島田も心配だったようだ。

吉井「平気だよ。もう大丈夫だから」

美波「よかった・・・ウチが殴る余地はまだあるんだ・・・」

別の意味だったが。そう言えば、吉井
を殴るのが趣味だったか。

吉井「ああっ！もうダメ！死にそう！！」

慌てて腕を押さえ瀕死を装う吉井。
腕じゃ致命傷にはならないぞ？

雄二「そのバカはどうでもいい。それよりも作戦会議（ブリーフィング）だ」

そう言って外に行く坂本。
しかしAクラスの前にDクラスに攻め込むか。
すぐにAクラスに攻め込んでも勝ち目は無いが
何故Eクラスではないんだ？
何か狙いがある筈だ。

美波「クォヴレー、いくわよ」

ク「ん、了解した」

島田に呼ばれたので一度思考を中断する。
兎も角、まずは坂本の作戦を聞こう。
彼の頭脳はリーダーとして申し分ない。
どんな戦略を練っているのだろうか・・・・・・

現在屋上にて作戦会議(ブリーフィング)を
行っている。
屋外なので少し強い風が吹いている。

雄二「明久。宣戦布告はしてきたな？」

明久「一応今日の午後に開戦予定と告げてきたけど」

美波「じゃあ、先にお昼を食べてからってことね？」

雄二「そうなるな。明久、今日の昼ぐらいはまともな物食えよ？」

明久「そう思うならパンでもおごってくれると嬉しいんだけど」

ク「なんだ？吉井は昼食を取らないのか？」

明久「いや、一応食べてるよ」

雄二「・・・・・・あれは食べてると言えるのか？」

どうも訳ありのようだ。

明久「何が言いたいのさ」

雄二「いや、お前の主食ってーーー水と塩だろう？」

アラドが聞いたら卒倒するような食生活だな。
というか、よく生きているな。

明久「きちんと砂糖だって食べているさ！」

姫路「あの、吉井君。水と塩と砂糖って、食べるとは言いませんよ．．．．．．」

秀吉「舐める、が表現としては正解じゃろうな」

ク「しかし何故そんな食生活を？」

明久「し、仕送りが少な「食費も全部遊びに使い込んでるからだ」」

自業自得と言うやつだな。

．．．似たようなＰＴのパイロットがいたな。

姫路「．．．．．．あの、良かったら私がお弁当作ってきましょうか？」

明久「ゑ？」

字が違うぞ。

明久「本当にいいの？」

姫路「はい。明日のお昼で良ければ」

雄二「良かったじゃないか明久。手作り弁当だぞ？」

明久「うん！」

久しぶりにまともな食事ができるわけだから
嬉しいだろうな。
美波「・・・・・・ふーん。瑞希ってば随分優しいんだね。吉井だけに作ってくるなんて」
何故か不機嫌な島田。
ク「どうかしたか？島田？」
美波「・・・・・・何でもないわよ」
？？？　　よくわからん
姫路「あ、いえ！その、皆さんにも」
雄二「俺達にも？いいのか？」
姫路「はい。嫌じゃなかったら」
本人分も合わせて七人分か。
秀吉「それは楽しみじゃのう」
ム「・・・・・・（コクコク）」
美波「・・・・・・お手並み拝見ね」
ク「すまない。大変だろう？」

姫路「いえいえ。そんなことないです」

ここまで言うのなら平気だろうな。

ク「なら、その好意に甘えさせていただくとしよう」

姫路「はい。楽しみにして下さいね（ニコッ）」

急に明久と土屋が鼻血の海に沈んだ。

明久「クォヴレーはあの笑顔を見て平気なの？」

ク「？　　何がだ？」

雄二「アホ二人はほっといて試召戦争だ」

本題に入るのは良いがあの二人の鼻血の量は

致死量だぞ？

雄二「大丈夫だ。問題無い」

大丈夫な気がしないのは何故だ？

秀吉「雄二よ。一つ気になっていたんじゃが、どうしてDクラスなんじゃ？段階を踏んでいくならEクラスじゃろうし、勝負に出るならAクラスじゃろう？」

ク「俺も気になっていた。どういう考えがあるんだ？」

雄二「いいだろう。まずEクラスだが、クォヴレーは兎も角、姫路

に問題が無い以上正面からでも勝てる。Aクラスが目標である以上、Eクラスと戦ってもメリットが無い」

ク「ならDクラスとは正面からぶつかっても勝てるのか？」

雄二「クォヴレーがいるなら余裕で勝てる」

明久「じゃあクォヴレーがいるならAクラスとも十分に戦えるんじゃないの？」

雄二「初陣だからな。派手にやって今後の景気づけにしたいだろ？」

明久「だからDクラスなの？」

雄二「クォヴレーがいるなら余裕で勝てるからな」

・・・・・・それはつまり、

ク「俺はDクラス戦には参戦しないということか？」

坂本以外が驚いている。

何でそうなるか分からないだろうからな。

雄二「流石だな。そこまで読むとは」

ク「あそこまで強調すればな」

不自然に強調していたからな。

俺がいれば勝てると。

明久「何でさ雄二！！クォヴレーがいるなら余裕でかてｒ「そこだ明久」え？」

雄二「クォヴレーがいなくても勝てることをクラスの連中にわからせないといけないんだ」

そう。重要なのはそこだ。

秀吉「どういうことじゃ？」

ク「俺がいればクラスの連中は間違いなく俺を頼る。しかし俺がやられたときクラスの連中はどうなる？
　間違いなく士気は落ちる。そうなればかなりこれはマイナスだ」

明久「でもＤクラスに負けちゃったら意味が無いじゃないか？」

雄二「落ち着け明久。クォヴレーがいなくても勝てる」

美波「本当なの？」

雄二「ああ、俺が勝たせる。何故ならーーーウチのクラスは最強だからな」

ク「最強では無いだろうがな、最高とは言えるだろう」

彼らも最高の仲間達だったからな。

美波「最高のクラスね・・・面白いじゃない！！」

秀吉「Aクラスの連中を引きずり落としてやるかの」

ム「・・・・・・（グッ）」

姫路「が、頑張りますっ」

明久「うん！見ててよクォヴレー！絶対勝つからね！」

ク「ああ、期待して待っている」

雄二「それじゃあ、作戦を伝えるぞ」

さあ、どうなるかな？

勝利を信じて待つしかないがな。

頑張れよ。みんな。

～ｓｉｄｅｏｕｔ～

第四問　ブリーフィング（後書き）

作「放課後座談会～～！！！」

「「「イエーイ！！！！！」」」

作「まずアンケートだ。結果は・・・高橋先生と木下優子です！！！つーかこの二票しか無かったｏｒｚ」

明久「二票もあったの！！！！！？」

作「何その反応！！！！？」

雄二「まあヒロインが二人いるが、どうするんだ？」

作「何とかする」

ム「・・・・・・ムッツリ商会からお知らせ」

ク「どうした？」

ム「・・・・・・のらねこ様からいただいた『クォヴレーちゃんｖｅｒ初〇ミク』の売り上げがでた」

作「確か千枚だよな？」

ム「・・・・・・好評につきさらに一万枚焼き増し」

明久「なんですとぉぉぉーーー！！？」

ム「・・・・・・合計千百万円也」

ク「複雑だ・・・・・・・」

作「７０％だから七百七十万円万事屋銀ちゃんに」

ク「さらに銀時には特製トロンベパフェ（高さ５０ｃｍ）を」

ム「・・・・・・神楽には特製筍の炊き込みご飯（２０升）を」

雄二「さらにクォヴレーちゃんに衣装を提供した土方には十万円分のマヨネーズ
を贈るぜ」

作「新ぱｔ・・・童貞ダメガネには姫路料理フルコースだ。これ食わねーと他の人の分が届かんからな（ニヤニヤ）」

ム「・・・・・・鼻フックの恨み」

秀吉「定晴にも炊き込みご飯を贈るぞい」

作「と言う訳で今回のらねこ様に贈った写真『ＫＡＩＴＯコスクォヴレー＆ａｍｐ；鏡音レンコス秀吉』を読者の皆様から先着で十名の方にプレゼントします！！」

ク「欲しいやつは感想でな」

作「ではまた次回！！」

ム「・・・・・・のらねこ様にはこっそりプレミアム版を贈呈」

作「しっ！！声がデカい！！」

第五問　チュートリアル（前書き）

超難産でごぜーました

こんな駄文で大丈夫か？

第五問　チュートリアル

【第四問】

問　以下の問いに答えなさい。

『（1）４ｓｉｎＸ＋３ｃｏｓ３Ｘ＝２の方程式を満たし、かつ第一象限に存在するＸの値を一つ答えなさい。

（2）ｓｉｎ（Ａ＋Ｂ）と等しい式を示すのは次のどれか、?～?の中から選びなさい。

?ｓｉｎＡ＋ｃｏｓＢ　?ｓｉｎＡ－ｃｏｓＢ

?ｓｉｎＡｃｏｓＢ　?ｓｉｎＡｃｏｓＢ＋ｃｏｓＡｓｉｎＢ』

姫路瑞希&クォヴレー・ゴードンの答え

『（1）　Ｘ　＝　π／６　（2）　?』

教師のコメント

そうですね。角度を『　。』でなく『π』で書いてありますし、完璧です。

土屋康太の答え

『（1）　Ｘ　＝　およそ３』

教師のコメント
およそをつけて誤魔化したい気持ちもわかりますが、これでは正解に近くても点数はあげられません。

吉井明久の答え
『（2）およそ？』

教師のコメント
先生は今まで沢山の生徒を見てきましたが、選択問題でおよそをつける生徒は君が初めてです。

ゲスト解答者キョウスケ・ナンブの答え
『（2）？に全賭けだ．．．！！』

エクセレン・ブロウニングのコメント
はぁ~ い残念？全額没収ねぇん♪

～クォヴレーｓｉｄｅ～

鉄「では、後をよろしくお願いします。ギリアム先生」

ギ「承知した」

今俺は体育館にいる。どうやらここで召喚獣の操作訓練を行うようだ。

ピコーン♪

鉄「ん？早速戦死者だな。では、私はこれで・・・ 戦死者は補習ーーーーーー！！！」

そう言ってとても人とは思えん速度でいなくなってしまった。剣鉄也を思い出す。・・・ いかん、本気でグレートに乗っている気がしてきた。

ところ変わって戦場では

鉄「戦死者は補習ーーーーーー！！！」

「ゲッ！鉄人！！！」

「ウソだろ！！？体育館に用事があるって言ってたぞ！！？」

鉄「安心しろ、別の先生に引き継ぎを頼んできたからな。貴様らの補習はバッチリしてやる」

「「「「安心できるかーーーーーー！！！！！」」」」

戻りまして～

ギ「まずは、自己紹介をしておこう。情報科担当のギリアム・イェーガーだ」

ク「Fクラスのクォヴレー・ゴードンです」

似たような男を別世界で見た気がする。

ギ「生徒は私をアポロン先生と呼ぶ」

関連性が無い気がする・・・いや、あるのか・・・？

ギ「では、フィールドを展開する」

一旦思考を中断し、訓練に頭を切り替える。

辺りが少々暗くなり、召喚フィールドが形成される。

ギ「そう緊張しなくても平気だ。では、召喚してみたまえ。召喚ワードは召喚（サモン）だ。」

ク「了解しました。試験召喚獣・・・召喚（サモン）？」

そう叫ぶと幾何学的な魔方陣が足元に現れ、俺の召喚獣が召喚

される。
見た目は黒い学ランのような制服で、金のラインがはいっている。
（※見た目はマブラヴのタケルちゃんが着てた制服です。ｂｙ作者）
ギ「ふむ、召喚できたようだな。召喚獣の武器は・・・どうやら銃のようだな」
改めて召喚獣を見てみると、確かに右手に・・・ツイン・ラアム・ライフルを装着している。随分久しぶりに見たな。
ギ「では、まずは基本からだ。召喚獣を動かして体育館を一周させてみろ」
試しに動かしてみたが１０歩目あたりで転んでしまった。むう、難しいな。
ギ「そう深く考える事はない。大切なのはイメージだ」
ク「イメージですか・・・」
ギ「そうだ。例えば、観察処分者君はゲームのコントローラーを頭でイメージしているようだ。さしずめ、召喚獣はゲームのキャラクターと言ったところだな。彼の操作の上手さはおそらくそういった要因もあるのだろう」
成る程。要は自分が一番得意な動かし方を頭でイメージすれば良い訳か。
これも観察処分者として召喚獣を扱って身につけた知恵なのだろう。少し吉井を見直す必要があるようだ。

ピンポンパンポーン♪

《連絡致します》

突然放送が入った。この声、須川か？

《船越先生、船越先生。吉井明久君が体育館裏で待っています》

船越教諭？吉井が待ってる？・・・成る程、状況打破の為の偽情報か。

《生徒と教師の垣根を越えた、男と女の大事な話があるそうです》

ク「？？？　どうされたのですか？ギリアム先生」

ギ「・・・いや、なんでもない」

明久？『須川ぁぁぁぁぁぁぁっっ！！！！！』

吉井のこれ以上無いくらい恨みのこもった悲鳴が聞こえた気がした。

ギ「さあ、気を取り直そう」

促され再度集中する。イメージは俺が一番慣れている操作・・・いや、操縦方法。

ギ「！！　ほう・・・」

目に見えて動きが良くなる。サイズは完全に違うが問題は無さそう

だ。
今俺は頭の中にＰＴのコックピットをイメージしている。やはり俺にはこれが良くイメージしやすいようだ。
ギ「よし、その調子だ。次はーーーー」

しばらくして～え？手抜き？見たって仕方ないじゃんｂｙ作者

ギ「よし、今日はここまでだ」
ク「はい。ありがとうございました」
ギ「おそらく明日は君のクラスは補給試験だろうから、その時間を使おう。次は戦闘訓練だ」
ク「はい、しかしまだ戦争は終わって無いようですが・・・」
ギ「いや、どうやら終わったようだ」

鉄『戦争終結！！！勝者、Ｆクラス！！！』

宣言通り勝ってみせたか、やはり良い奴らだ。

ギ「仲間達をねぎらってこなくていいのか？」

何時の間にか出入口の壁に背を預けているギリアム教諭

ク「よろしいのですか？」

ギ「先程も言ったが今日はここまでだ。いってくるといい」

ク「・・・・・ありがとうございます」

仲間達をねぎらうべく、俺は体育館をあとにした。

ギ「・・・ ヒーロー戦記もよろしく」

⟨sideout⟩

第五問　チュートリアル（後書き）

作「放課後座談会～」

「「「イエーイ」」」

明久「なんで皆してテンション低め？」

作「怒られないか内心ビクビクしてんの」

雄二「まずは、ギリアム少佐だな」

作「別人です。そっくりさんです。・・・多分」

雄二「妙な伏線を張るな！！！」

作「いやね、こういう訓練ってのはさ、監督の先生が絶対いるじゃん。でも鉄人は補習で忙しいじゃん。で、どうしようか悩んでこうなった」

明久「召喚獣の操作については？」

作「俺の妄想。いや多分そういう動かし方だと思うよ」

雄二「釈然としねぇな」

作「意見その他は感想で」

ム「・・・・・・１ヶ月ぶりのムッツリ商会」

作「この1ヶ月の売り上げは～～～」

１０億円（キラキラキラ）

作「つーわけで7億ほど万事屋銀ちゃんに・・・」

雄二「ちょっと待てぇぇぇぇぇーーーー！！！！」

作「なんだよ」

雄二「写真だけでこんなんなるかぁぁぁぁぁーーーー！！！？」

作「ちゃんと売り物作って売ったんだよ」

ム「・・・これ」

つ　クォヴレーちゃん抱き枕カバー（ノーマル&裸Yシャツ）

クォヴレーちゃんねんどろいどプチ

クォヴレーちゃんコスプレ写真集

作「売り上げの6割がこれ」

雄二「値段は？」

ム「・・・ひとつ３０００円から」

作「さらに巫女服ｖｅｒ、セーラー服ｖｅｒ、ナース服ｖｅｒ、体操服ｖｅｒの計５種類だ」

ム「・・・作ってて鼻血吹きまくった」

明久「ちなみに残り４割は？」

作「計算ができた・・・だと・・・」

明久「ふざけてないでおしえてよ！！」

ム「・・・男クォヴレーと秀吉で３割、その他１割」

作「男クォヴレー版カバーは３種類だ」

ム「・・・では発送準備」

作「のらねこ様宛にクォヴレー抱き枕カバー全種類（男女版合わせ）、銀さんにトロンベパフェ（宇治金）神楽に米３ｔ、土方に無駄に地鶏の卵を使ったマヨネーズ、お妙さんにカロリー１／１０ハーゲンダッツ３年分、眼鏡にお通ちゃんが優しく起こしてくれる目覚まし時計を送ります」

ム「・・・男版はタンクトップｖｅｒ、Ｙシャツｖｅｒ、パイスーｖｅｒの３種類」

作「レイジングラ様のとこの３人宛に一人あたり２千万相当の金銀財宝を送ります」

作「最後にＫＵＲＥＮＡＩ様には抱き枕カバー全種類とＩＳ学園に一億円寄付します」

作「ムラサメ様のとこのフォルテ宛にバトルチップ『リカバリー３００』を４枚送ります」

雄二「随分送るな」

作「久しぶりだから奮発した。では次回は初戦闘描写です。正直不安」

明久「くじけないで！！やればできる！！」

作「あとお弁当」

明久「何を書く気だクソ作者！！」

作「ひでえ」

ク「まあ、早く更新しろ」

作「うん、では次回でまたお会いしましょう~」

ム「・・・ＩＳ学園の女子に問うイケメンの写真が欲しいか　？」

作「またなーにーをーしーてーいーるー？」

第六問　戦闘訓練とお弁当とデジャヴ～Ａパート～（前書き）

長い上に会話だらけ

・・・なんだこれｏｒｚ

・・・見捨てないでえええええええええ！！！！！！！！！！

第六問　戦闘訓練とお弁当とデジャヴ～Ａパート～

【第五問】

問　？以下の文章の（　？　？　？　？　）に正しい言葉を入れなさい。

『光は波であって、（　？　？　？　？　）である』

姫路瑞希＆ａｍｐ；クォヴレー・ゴードンの答え

『粒子』

教師のコメント

よくできました。

土屋康太の答え

『寄せては返すの』

教師のコメント

君の解答はいつも先生の度肝を抜きます。

吉井明久の答え

『勇者の武器』

教師のコメント
先生もＲＰＧは好きです。

ゲスト解答者リュウセイ・ダテの答え
『アクシズを押し返すの』

教師のコメント
先生も逆シャアは好きです。

～クォヴレーｓｉｄｅ～

？？　？丁度俺がたどり着いた時、何やら真剣に話す坂本と姫路、
そして姫路のスカートを凝視する吉井がいた。

ク「・・・何をしてるんだ？吉井」

明久「はっ！！クォヴレー！！君が僕の中の天使だったの！？」

ク「いきなり何を言い出すんだお前は・・・」

？？　？吉井とのやり取りをしていると、坂本がこちらに気付いたらしく声をかけてきた。

雄二「お、クォヴレー。こっちは勝ったぜぇ、そっちはどうだった？」

ク「ああ、まずまずと言った所だ。それとまずは1勝目だな、おめでとう」

雄二「サンキュー。ところで、次の戦線には参加できそうか？」

ク「いや、今日は操作訓練で時間を潰してしまったからな。戦闘訓練は明日行う事になっている」

姫路「大丈夫ですよ、クォヴレーさん。試召戦争のあとは回復試験を受けないといけませんから時間はあります」

雄二「姫路の言う通りだ。回復試験は明日からだからな、少なくとも2日はかかる。なにせ総合科目勝負までやったからな」

？？　？　そう言って坂本は溜息を吐いた。

ク「2日か・・・何とかしよう」

雄二「別に単騎で突撃させる訳じゃないんだ。焦らなくていいぜ」

明久「そうだよクォヴレー。僕達に任せといてよ」

？？　？そう言ってウィンクする吉井。

雄二「いや、お前はあてにならん」

明久「酷いよ雄二！！！」

？？　？そして今下校中だ。偶然吉井や坂本と家の方向が一緒、しかも吉井の住んでいるアパートの近所だった。

明久「じゃあ、クォヴレーも1人暮らし？」

ク「ああ、俺の後見人が用意してくれていた」

？？　？『この世界』に来てあの名前を見た時は、正直目を疑った。

雄二「そういやお前の後見人って誰なんだ？一軒家用意する位の金持ちなんてそうそういないぞ？」

ク「レーツェル・ファインシュメッカーだ」

？？　？今でも信じられないからな。

明久「・・・ええええええええええええ！！！！！！」

雄二「な・・・何いいいいいいいいいいいい！！！！！！」

？？？？お前達の反応に驚いた。

ク「いきなり大声を出すんじゃない」

明久「だってあのレーツェル・ファインシュメッカーだよ！！？」

（詳しくは設定話でｂｙ作者）

？？？？そこまで有名人だったとはな。

ク「それはさておき、テストの用意はいいのか？」

明久「・・・あ！教科書置いてきた！！」

雄二「何やってんだ、お前（呆）」

明久「ゴメン！！先行ってて！！」

雄二「もちろんだ。待ってるわけないだろう」

明久「薄情者ーー！！」

？？？？そう捨て台詞を残して吉井は学園に戻って行った。・・・・

さて

ク「坂本」

雄二「ん？どうした？」

ク「Ｄクラスとの戦後交渉の事なんだが」

雄二「なんだ、さっき明久にも言っただろう？俺達の目標はＡクラス、今回のＤクラス戦は「いや、そこでは無い」じゃあなんだ？」

ク「Ｂクラスの室外機の破壊が何のメリットに繋がるか気になってな」

雄二「ま、楽しみにしておけ。作戦の一部として今は明かせんからな。何処で聞き耳を立てているか分かりゃしないからな」

ク「確かにＢクラスともなれば用意は必要だろうが、少々慎重過ぎなのではないか？」

雄二「あー、クォヴレーはアイツの事知らないか・・・」

？？　？坂本が苦虫を噛み潰したような顔をする。

ク「アイツとは？」

雄二「Ｂクラスの代表なんだが、根本恭二と言ってな」

ク「そいつがどうかしたのか？」

雄二「とにかく評判が悪い奴でな、目的の為には手段を選ぶ様な奴じゃないんだ。流石に何をしてくるか分からないからな」

ク「用心に越した事はないと」

雄二「そう言う事だ・・・じゃあ、俺はここまでだ。また明日な」

??　?そう言って坂本は去って行った。

ク「目的の為には手段を選ば無い・・・か・・・」

??　?まるで昔の俺の様だ。任務の成功を最優先し、非戦闘員の命すら省みる事の無かったあの頃の俺と・・・そして、それは間違いだと言ってどんなに困難でも、任務よりも人命を第一に選んだ彼等に俺は考えを徐々に改めさせられた。

ク「負けられなくなってしまったな」

??　?かつての自分との戦いに絶対の勝利を誓う。彼等の生き様が正しいことを証明する事になるだろう戦いに。

??　?だが、まずはやるべき事がある。明日の召喚獣の戦闘訓練だ。明日のテストの時間をフルで使って訓練を行う事になる。どこまで戦える様になるか気にはなるが全ては明日だ。今日は少し早く寝るとしよう。

そう思いながら家の玄関の扉を開けた。

ーーーーーーー翌日ーーーーーーーーー

ク「しかしよく説得できたな」

雄二「まあ、この位できなきゃ代表じゃねえだろ」

??　?英語の教科書を読みながら坂本が答える。先程Ｆクラス全員に設備を交換しなかった事の説明をしていたところだ。坂本の働きが功を奏し全員が納得した。

雄二「ん?クォヴレー、ここの訳はどうやる?」

ク「ああ、見せてみろ」

問　?次の英文で書かれた会話文を日本語に直しなさい。

Ｓａｍ（サム）とＭａｒｙ（メアリー）の会話です。

Sam：Hello？

？

Mary：Hello，this is Mary speaking. Are you Jack？

Sam：No. I'm Sam.

Mary：Oh Jack，why are you absent from school today？

Can you come to school tommorow，can't you？

ク「・・・・・・・・・」（汗）

雄二「どうした？」

ク「いや、何でも無い」

？？　？因みに訳すると・・・

サム：もしもし？

メアリー：もしもし、メアリーです。ジャックですか？

サム：いえ、私はサムです。

メアリー：おー、ジャック、なんで今日は学校を休んだの？明日は来れるわよね？

？？　？・・・・・・メアリー、人の話を聞け。というより高校生の英語の内容としてこれはどうだ？

雄二「って、クォヴレー、お前時間じゃないか？」

ク「ん？もうそんな時間か。いってくる」

？？　？また体育館で訓練だが、今回の訓練は戦闘訓練だ。より集中しなければ・・・・・・

明久「あ、おはよう。クォヴレー」

ク「ああ、おはよう吉井。時間ギリギリじゃないか？」

明久「間に合ったんだから許してよ」

？？　？そう言って吉井は教室に入って行ったが、少しもしないうちに教室から飛び出して走って行った。何があったんだ？

第六問　戦闘訓練とお弁当とデジャヴ～Ａパート～（後書き）

作「長らくお待たせしといてこの有様である事は作者としても大変遺憾であります」

ク「全くだ」

明久「死ねばいいのに」

雄二「で？次はいつになるんだ？」

作「早くて今月中かと．．．」

雄二「叩かれんぞお前」

作「重々承知しております．．．」

ク「まあ、こんな奴の亀更新かつ駄文だが、これからもよろしく頼む」

作「毎日とか週一とかで更新できる方は本気で尊敬するよ．．．」

雄二「ならサッサと筆を動かせ！！！」

ゴチンッ！！

作「あ痛ッ！！」

第六問　戦闘訓練とお弁当とデジャヴ～Bパート～（前書き）

長い・・・長すぎる・・・

大丈夫かな？大丈夫だよね？大丈夫だと言ってえええええええ！！！！！！

第六問　戦闘訓練とお弁当とデジャヴ～Ｂパート～

前回のあらすじ

吉井がすごい勢いで何かから逃げ出した。

～クォヴレーｓｉｄｅ～

ギ「来たようだな」

またも壁に寄りかかっているギリアム教諭。

ギ「今回は本格的な戦闘訓練を行う」

そう言うとフィールドを展開する。だが前回と違い、墓場を彷彿とさせるオブジェクトが表示されており、天井部分には満月が浮かんでいる。

ク「これは一体・・・？」

ギ「かつて新入生の実習の際に使用する召喚フィールドの没案を用意した」

実習に使用するには遊び過ぎな気がする。これを見たらFクラスの奴等なら大はしゃぎするだろう。

ギ「だが、難易度は本格的に設定されている。遊びだと思っていると直ぐにやられるぞ？」

そう言うと腕に付けている小型の端末を操作し始めた。操作を終えると召喚獣の頭程の大きさの何かが喚びだされた。

ギ「今回お前が行うのは弓を装備した召喚獣と同じ様に的当てだ」

姿がはっきりと見えた。なるほど、ジャック・オ・ランタンか。このフィールドにピッタリな的だ。

ギ「召喚後、私の合図で訓練を開始する。準備は良いか？」

ク「勿論です。試獣召喚（サモン）！！」

幾何学的な模様の魔法陣が現れそこから昨日と同じ装備の召喚獣が現れる。このフィールド内でも召喚獣に変化は無い様だ。点数が表示される。

クォヴレー・ゴードン
訓練用特別点　１００点

ギ「目標撃破数５０！！では．．．状況開始！！！」

目の前にＳＴＡＲＴの文字が浮かび訓練が始まった。それと同時に的が５体に増え１列に並ぶ。

まずは目の前でケタケタと笑う的に向け引き金を引く。発射された弾丸はちょうど眉間部分に命中し、爆散する。続けざまに両脇の２体を撃破しながら接近し、銃剣を装着。右端の１体を斬り伏せる。威力に問題は無い様だ。振り向きざまに照準を合わせ、ラスト１体を撃ち落とす。

ギ「銃剣とは予想外だな．．．」

セリフとは裏腹にたいして驚いていない様子のギリアム教諭は端末をいじり、新たに５体的が現れる。
すぐに銃口を向けるがなかなかの速度で避けられてしまう。これには少々面食らったがすぐに思考を切り替え、軌道を読んで撃ち落とす。メギロート程では無いが厄介だ。残りも殲滅したところでギリアム教諭を見ると壁に寄りかかりながら

ギ「的が動かないとは言った覚えは無いぞ？」

とのたまった。おそらく次は攻撃もあり得る。などと考えてる内に今度は１０体、俺の召喚獣を取り囲む様に現れる。慌てず１体撃ち落とし、銃剣でさらにもう１体斬り捨てる。次の標的に銃口を向けた途端、召喚獣の背後から的の１体が突っ込んできた。召喚獣を操作し、その場でトンボ返りさせ突っ込んできた的の上を取る。そのまま弾丸を撃ち込んで沈黙させる。着地と同時に別の的が口から青白い炎を吐き出してきたが難なく避けて撃ち落とす。流石に突っ込んできた時は危なかったが、攻撃パターンはこれだけのよ

うなので後は苦戦せずに５０体全て撃ち落とした。・・・ 最後の５体の動きはファンネルのそれだった為時間を食ったが。

ギ「的に当てる分に問題は無いようだな」

最後のやつはもはや的当てでは無い。

ギ「次は対人戦・・・ もっともＣＰＵだが丁度良いだろう」

ギリアム教諭が端末をいじると今度は骸骨・・・ スケルトンとか言うやつが３体地面から現れる。手には剣や斧と言った武器を持っている。

ギ「１０体倒してみろ」

スケルトン・ソード×２

スケルトン・アックス

残りＨＰ　　１００×３

再びＳＴＡＲＴの文字が浮かび訓練が再開される。１番近い位置にいたスケルトンが突っ込んで来るが先程よりも圧倒的に遅い。踏みつけるかたちで跳び越え、後続の２体を撃つ。弾丸は寸分違わず頭部を捉え、２体ともガラガラと崩れていった。着地後、すぐさま振り返り剣を振りかぶったスケルトンの眉間に銃口を押し付け引き金を引く。

スケルトン・ソード×２
スケルトン・アックス
残りＨＰ　　０×３

難なく殲滅に成功した。

ギ「通常戦闘に問題は無いな。では特別に腕輪の使用を許可する」

そう言うと俺の点数が修正される。

クォヴレー・ゴードン
訓練用特別点　　４５０点

召喚獣の左腕に黒い腕輪が装着される。確か４００点以上の点数を取った教科のフィールドでは特殊能力付きの腕輪を装備して出てくるというルールがあった。

ギ「起動してみろ。起動ワードは決まってはいないから好きにしたまえ」

だとしたら、これが1番しっくりくる。

ク「テュトラクス・グラマトン・・・」

すると腕輪が4分割され、4匹のコウモリに変わる。普通のコウモリと違い背中に砲身を備えているが間違いなくこれは・・・ガンスレイヴだ。

ギ「では残り7体一気に行こうか？」

言うが早いかスケルトンが現れる。

スケルトン・ソード×2

スケルトン・アックス×2

スケルトン・アーチャー×3

残りHP　100×7

試しに1体のスケルトンの頭部にガンスレイヴの攻撃を当ててみる。操作感覚はベルグバウの時となんら変わりない。的確に命中させる。

スケルトン・ソードA

残りＨＰ　　９５

流石に一撃の威力が低いようだが、おそらく1体につき攻撃力は5、ガンスレイヴは4体あるから総合的に２０ある。十分だ。

先程攻撃したスケルトンが剣を振り下ろすがサイドステップでそれを躱しガンスレイヴとの集中砲火で蜂の巣にする。間髪容れずに近付いてきたもう一体の首を銃剣で刈り取る。今度は弓を持ったスケルトン達が矢を射ってくるのを銃剣で切り払い、ガンスレイヴを飛ばし殲滅する。残った2体のスケルトンを相手に、ふと考えついた事を実行する。

ク「エメトアッシャー・・・・」

するとガンスレイヴが2体ずつ腰に止まり、2門の砲身をかたどる。

ク「ダブルシューーーーーート！！！！！」

そう叫ぶと砲身から2発のエネルギー弾が発射され、残り2体のスケルトンに命中、一撃で葬った。

スケルトン'ｓ
残りＨＰ　　０

ギ「どうやら腕輪の能力は追加武装のようだな」

そう結論するのが妥当だろう。もう一つ武装があるが、今試した方が良いだろうな・・・

ク「ギリアム先生、出来るだけＨＰの多い的を喚(だ)してもらえませんか？試したい事があるのですが」

ギ「・・・良いだろう」

先程のスケルトンよりも大きな魔法陣が現れ、中から冠を冠った巨大なカエルが飛び出してきた。

皇帝カエル
残りＨＰ　３０００

先ずはもう一度エメトアッシャーを撃ち込む。

カ「ゲコーーーー！！？」

皇帝カエル
残りＨＰ　２３００

一発で７００も削るか。広域殲滅にはもってこいだな。砲身になっていたガンスレイヴがもとのコウモリに戻った。どうやら４発が限度らしい。次だ。

ク「アキシオンバスター！！」

今度は胸部に４体とも集まり１つの砲身を形成する。砲身にエネルギーが溜まり強大なエネルギー弾が発射の時を待っている。

ク「マキシマムシューーーーーーート！！！！！」

カ「ゲ・・・ゲコーーーーーーーーーー！！！！！！」

発射されたエネルギー弾はカエルの腹を貫き、フィールドの端まで勢いを殺す事なく飛んでいった。

皇帝カエル
残りＨＰ　　－７００

ピッタリ２０００。戦術兵器だなこれは。アキシオンバスターの砲身がガンスレイヴに戻るのをみながらそう考えた。一発しか撃てないまさに切り札だ。

ギ「では次だ・・・と言いたいがもう昼休みの時間だな」

チャイムが鳴る。意外と時間が過ぎていたようだ。

ギ「昼食をとってから再開しよう。いったん解散だ」

そう言うと召喚フィールドを消してさっさといなくなってしまった。・・・いったん教室に行くか。

～side out～

～明久side～

さ・・・散々な一日だ。朝から貞操の危機に直面するとは・・・。まあ、待ちに待った昼休み、お昼どうしようかな。

雄二「おう、クォヴレー。お疲れ」

ク「・・・お前達を見ると疲れた気になれないな」

あ、クォヴレーが帰ってきた。

秀吉「まあ、テスト漬けじゃったからのう。無理もないじゃろ」

ム「・・・・・・・・・・（コクコク）」

それを見て髪をポニーテールにした秀吉とムッツリーニが来た。くっ・・・・!!秀吉め・・・・!!男なのに僕を惑わすとは・・・・!!

ク「で、テストの出来はどうだ？」

秀吉「・・・・聞かんどいてくれ」

美波「数学は得意なのに・・・・」

ク「他の教科も十分解く実力はあるだろうに」

美波「・・・・日本語がまだよく読めないのよ」

ク「・・・・スマン」

一気に空気が重くなる。ってあれ？島田さん？何時の間にいたの？

明久「そ、それにしてもクォヴレーは日本語上手だよね。誰かに習ってたの？」

ナイスフォロー!!僕!!

ク「ああ、後見人（レーツェル）の友人に日本好きがいてな」

雄二「ほ～、どんな奴だ」

ク「示現流と呼ばれる剣術を修める程の日本好きだが、極度の下戸でな。日本酒どころか消毒用アルコールで酔い潰れた程だ」

どんな下戸だ。聞いた事無いぞ。

秀吉「ず・・・随分個性的な友人じゃの・・・（汗）」

明久「い・・・いろんな人がいるんだね（苦笑）」

ク「ところで昼食はどうするんだ？」

あ、そうだった。お腹減ってきたな。

雄二「そうだな。学食行くか～。今日はラーメンにカツ丼に炒飯にカレーにすっかな～」

秀吉「よく食うのう坂本・・・ん？どうしたのじゃクォヴレー？」

その声を聞いてクォヴレーを見るとなんか微笑んでるクォヴレーが。・・・ヤバイ、世の女子が全員惚れるくらい絵になってる。

ク「いや、なに。坂本の食う量を聞いて俺の友人を思い出してな・・・顔に出てたか？」

秀吉「なにやら微笑ましいモノを見とったようじゃったぞ」

明久「どんな人だったの？」

クォヴレーの友達の話は聞いた事が無いけど、きっといい人達なんだろうな～。

ク「坂本が今言った量の3倍は食べたな」

明久「一日の量にしても多過ぎない！！？」

サラッとそんな事を言っているけど流石に異常な量でしょ！！そいつは絶対僕の敵だ！！

美波「随分と太ってそうね、その人」

ク「いや、体型は明久と変わらん。因みに男だ」

訂正。全女性の敵だった。やめて島田さん八つ当たりで僕の首を締めないで。

ク「一食の分でそれだけの量を食べても三食キッチリ取ってたしな」

って一食分かよっ！！！！

雄二「まあ、それは後にして早く食堂行こうぜ。腹減ってしょうがねえ」

今僕は酸素が欲しい。

姫路「あ、あのっ！！皆さん！！」

島田さんがチョークスリーパーからキャメルクラッチに移行しようとした所で姫路さん登場。

雄二「どうした姫路？お前も学食行くか～？」

姫路「い、いえ・・・あの・・・お昼なんですけど・・・その・・・」

もじもじする姫路さん。キャメルクラッチのダメージが癒されていく。

ク「・・・もしや昨日言っていた弁当か？」

姫路「は、はい！！よかったらどうぞ！！」

身体の後ろに隠してたバッグを出してくる。姫路さん！！君はなんて良い人なんだ！！できれば島田さんのキャメルクラッチからも助けて欲しい。

雄二「此処じゃあ何だ。屋上行こうぜ。俺は飲み物でも買ってくっから」

姫路「あ、大丈夫です坂本君。飲み物も用意してきました」

素晴らしいぃぃぃぃぃぃぃぃぃぃぃぃぃ！！！！素晴らしいよ姫路さんんんんんん！！！！！！やっぱり君は女神だった首が痛いぃぃぃぃぃぃぃぃぃぃ！！！

雄二「島田ー、いつまでバカを弄ってんだ？さっさと行くぞ」

気がついたらもう皆移動してた。

で、屋上に着いた。僕達以外に人がいない為貸し切り状態だ。クォヴレーがレジャーシートを敷いてくれたのでそこに皆で座る。ちょっとしたピクニック気分だ。

姫路「あの、あまり自信無いですけど・・・」

ずっしりとした重箱の蓋を姫路さんが取る。一段目の箱には唐揚げや海老フライにアスパラ巻きなどのおかずが入っていて、二段目の箱にはぎっしりとおにぎりが入っている。凄く美味しそうだ。

明久「じゃあ、食べようか」

瞬時に雄二とムッツリーニに目配せして意思を伝える。

明久「姫路さん!!ゴチになります!!」

それ以外「いただきます」

姫路「ど・・・どうぞ」（若干明久に引き気味）

明久「雄二にムッツリーニ!!合図したじゃないか!!」

雄二「何の事だ？」

ム「・・・・・・（フルフル）」

くっ、定番のネタだというのに！！（作者の中学の）

ム「・・・・・・（ヒョイ）」

そんな事考えてたらムッツリーニが海老フライを取っていた。

パク　　ドバアッ！！（涙を流す音）

海老フライを食べた瞬間涙を流し始めた。

ム「・・・・・・旨い」

ムッツリーニが思わず喋る程旨いとは！！そう考えるよりも先に雄二と弁当の奪い合いを僕は展開していた。あ、ちゃんと皆で食べたよ？

ク「ありがとう姫路。旨かった」

姫路「いえいえ、お粗末さまでした（よ・・良かった～。お家に置いてあった『これで貴方もお弁当マイスター初級編（著者レーツェル）』のお陰ですね）」

なにやら談笑しているクォヴレーと姫路さん。美男美女なだけあって非常に絵になってる。う・・・羨ましいです。はい。

羨まししくなんか・・・

姫路「あ、そうだ皆さん。どうぞ、お飲み物でも」

秀吉「おお、すまんのう姫路」（ゴクゴク）

美波「本当に・・・美味しかったわ・・・」

明久「ところで、これはウーロン茶かな？」

姫路「いえ、私が作った健康ドリンクなんです」

バターン（秀吉が仰向けに倒れる）

明久「ひ、秀吉！？どうしたの！？」

秀吉「は・・・腹が膨れたせいか眠くなっての・・・（明久、覚悟して飲むのじゃ。凄まじい味じゃ）」

事の真相をアイコンタクトで伝えてくる秀吉。そ、そんなに？見た目ウーロン茶だよ？

姫路「あ、いけない。デザート用のスプーンを置いてきちゃいました。取ってきますね」

姫路さんが屋上の扉を閉めたのを確認して会議を始める。

雄二「どう思う？」

ク「心配はいらん。驚異的なのは味だけだ」

意外な方から意見がでた。

雄二「知っているのか？」

ク「・・・似たようなモノを飲んだ事がある。効能は確か疲労回復とーーーー」

秀吉「おお！！身体が軽いぞい！！」（キラキラキラキラ）

ク「美肌効果があった筈だ」

美波「何にも変え難いモノがあるのよ！！！」

一気にお茶？を呷る島田さん。君の勇気は忘れない。

バターン（美波、撃沈）

雄二「・・・で、残りはどうする？効果は確からしいが正直飲みたくねえ」

多分後水筒の半分くらいは残ってる。

ク「・・・俺がいく」

雄二「正気か？」

ク「任せろ。ある程度味には耐性がある」

そう言うと直接水筒からラッパ飲みを始めるクォヴレー。

ってそれは自殺行為だぞ！？突然過ぎて止めらんなかった僕達が悪

いのか！？

ゴクゴクゴクゴク　　ゴト（水筒を置く音）

明久「・・・クォヴレー？」

ク「・・・・・流石にキツかったか」

ニコッ

この時のクォヴレーの笑顔は撃墜された堕天使のように神々しくもどこか儚かった。

バターン

明久「クォヴレーーーーーーー！！！！！！」

この時の笑顔の写真は歴代記録を塗り替える勢いで売れたらしい。

あ、姫路さんが戻ってくる頃には2人とも復活してた。

～side　out～

第六問　戦闘訓練とお弁当とデジャヴ～Bパート～（後書き）

作「何とか間に合ったか・・・」

雄二「だからってこんな駄文の塊を投稿していいと？」

作「・・・・・」

雄二「よくはないが作者！！！姫路について聞こうじゃないか」

作「教導隊が1番の原作ブレイク要因です。特に名前だけの筈の食通が」

ク「・・・もう1人追加予定と聞いたが？」

雄二「まだ混ぜる気かお前！！？」

作「・・・うん」

雄二「向こうでみっちりシバくから覚悟しておけ」

作「戦闘訓練のフィールドもでっち上げだしね」

ク「どれ程叩かれるか見ものだな」

作「感想と御指摘のほう待ってます（T＿T）

第七問　Bクラス戦開幕　序（前書き）

受験が近くてパソコンを覗く程度しか時間無いっす

故にこれだけでも．．．

後でまとめます

第七問　Bクラス戦開幕　序

～クォヴレーｓｉｄｅ～

・・・ん・・・眩しいな・・・そうだ、確か姫路のお茶（健康ドリンク）を飲んで気を失ったのか。

秀吉「！！　気がついたのじゃなクォヴレー」

ク「ああ、皆は？」

秀吉「あのとおりじゃ」

そう言って指差した方を向いて見ると

明久「・・・」

雄二「・・・」

物言わぬ屍が二つ・・・いや

ム「・・・」

三つに・・・

姫路「ふう、食後にはこれですね～」

美波「ごくごくごく・・・」（バターン）

元凶のドリンクを飲んで一息入れてまったりしている姫路と再挑戦して再び沈んだ島田がいた。

～～～　一寸待つのじゃ　ｂｙ　秀吉　～～～

雄二「さて、今のうちにＢクラス戦について話しておかないとな」

若干だが顔色がいいのに調子の上がらない坂本が口を開く。

ク「今回も設備の交換は行わないのだろう？」

雄二「ああ、そうだ。俺たちの目標はＡクラスの設備だ」

美波「でも相手はＢクラスよ？何か作戦あるの？」

雄二「慌てんな、どこで聞き耳立ててっか分からんから言えんがな」

ム「・・・周囲に気配はない」

雄二「なら・・・クォヴレー。次から参戦してくれ」

明久「え！？大丈夫なの！？」

雄二「お前よりはるかに役に立つから大丈夫だ」

ク「心配はない。ギリアム教諭に鍛えてもらった」

雄二「なら、開戦と同時に回復試験を受けといてといてくれ。それと姫路」

姫路「はい」

雄二「今回は最初から出てもらう」

明久「え？何で？」

ク「向こうはこちらに姫路がいることを知っているからだ」

秀吉「先のＤクラス戦で情報は知れわたっておるからのう」

なら、懸念事項としては・・・

ク「俺のことはどうなってる？」

ム「・・・ 謎の銀髪美少年以外はまだ情報が出回ってない」

結構目立つとは思ったのだが意外だな。

ム「・・・ 稼がせてもらってる」

若干不穏な単語が聞こえたが、まあ流そう。

雄二「詳しい作戦はクラス全体で話す。とりあえず教室行くぞ、もう時間だ」

昼休みも終わる時間になってきたようなので教室に戻る。

～～～私も出番がほしいです　ｂｙディストラ　～～～

！？　何だ！？妙な殺気が！？

高橋「どうしました？ゴードン君」

ク「いえ・・・」

坂本の指示どうり回復試験を受けている最中だ。時間が飛びすぎだとかは言わないでくれ。すべて作者の技量のせいだ。っと、俺は何を言っているんだ？

ク「・・・終わりました、次を」

高橋「はい」

碌に見直しをせずにスピード重視で解いているため得点はいつもより低いはずだ。

ク「・・・ここまでで大丈夫か？」

とりあえず切り上げる。全教科５順しているからカバーはできているはずだ。

高橋「は、はい。では、点数を反映させます」

すぐに吉井たちの援護に行きたいが、坂本からの指示で俺はここに待機しなければいけない。

高橋「終わりました。これであなたも参戦可能です」

ク「ありがとうございます」

様子だけでも見に行こうと教室の引き戸に向かうが、

Ｂ１「お、おい！まだいやがった！！」

Ｂクラスの生徒がこちらに向かってきていた。主戦場とは違う方向から。

Ｂ２「かまわねえ、こいつのしてさっさとやるぞ！！」

Ｂ３「先生！！召喚許可を！！」

高橋「承認します」

B4「いくぜ！！」

「「「「試獣召喚（サモン）！！」」」」

仕掛けてくるか！！

ク「試獣召喚（サモン）！！」

召喚獣の情報が表示される。

Bクラス　中野　けいｔ「バァン！！」

B1「・・・は？」

できるだけ早く片付ける！！俺の情報が出る前にいけるか？

Fクラス　クォ「ガァンガァンガァン！！」ヴォレー・ゴードン

英語W　4・・・

『ほぼ同時に三体の頭を』撃ち抜いたが、名前を隠しきれなかったか。

鉄人「戦死者は補習ーーーーーーー！！」

さて、厄介なことになったもんだ。

明久「クォヴレー！！なんかそっちに鉄人が走ってったんだけどー！！」

向こうから吉井たちが来た。生き残ったか。

～ｓｉｄｅｏｕｔ～

～ｓｉｄｅ高橋教諭～

正直言って目を疑った。彼・・・クォヴレー・ゴードンがあの短時間で取った点数の高さに。碌に見直しをしないで取った点数だと聞いて普通ならカンニングを疑う--まして彼はＦクラスだ--ところだがさっきまで私と一対一で、目の前で受けていたのだ。いったい彼は何者なのだろう？

手元のノートパソコンに記録されている先ほど見えなかった彼の点数は・・・

高橋「クォヴレー・ゴードン・・・４８９点・・・」

とんでもない生徒が入ってきたわね・・・

～sideout～

第七問　Bクラス戦開幕　序（後書き）

頑張って残り仕上げてきます！！

もうちょっとお待ちを～（泣

第七問　Bクラス戦開幕　破（前書き）

デ「前書きを占拠しました。ディス・アストラナガンです。今回は説明回な上に若干のキャラ崩壊？があります。それでは、お楽しみくださいませ・・・」

第七問　Bクラス戦開幕　破

～クォヴレー　ｓｉｄｅ～

吉井達は無事に帰還したが、坂本の姿が見えん。何処に行ったのか分からないのに行動するのは得策ではないとして待機している。

明久「え！？Ｂクラス四人相手に瞬殺！？」

ク「こちらの情報をできるだけ見せないようにしないといけないからな」

姫路「でも、腕輪も無しだなんてすごいですよ！！」

ク「そういえば、姫路の腕輪はどのような能力なんだ？」

姫路「私のは『熱線』でした」

・・・リュウセイが聞いたら技名を付けそうだな。

雄二「おう。どうしたんだお前等？」

坂本が帰ってきたようだ。

ク「何処へ行っていたんだ？」

雄二「Ｂクラスから協定を結ぶよう交渉があってな。午後４時以降は停戦だ。その間戦争に関わる行為を禁止してな。で、何かあったのか？」

ク「教室にＢクラスの生徒が四人侵入。交戦しこれを撃退。だが向こうに俺の情報が出る事になった」

坂本が顔を顰める。

雄二「チッ！！根本のヤツクラス設備を潰す気で送り込んできやがったか！！まあ、その目的は果たせなくても俺の手札を見られちまったか・・・」

ム「・・・さらに悪いニュース」

音も無く土屋が帰ってきた。

ム「・・・Ｃクラスが戦争の準備を始めている」

いくらなんでもタイミングが良すぎるな。

ク「坂本」

雄二「わかってる。十中八九罠だ」

明久「え？何で？」

雄二「ちょっと考えればわかんだろドアホ！！いいか？Ｂクラスと

はさっき一時的な停戦協定を結んできた。条件はいっただろ？」

明久「戦争に関わる行為の禁止？」

ク「Cクラスが戦争の準備を進め始めた。標的はどこだ？」

明久「え～っと・・・Aじゃないし、Bクラスが弱った所を狙ってるんじゃないの？」

雄二「ハァ～、これだから明久は・・・」

明久「ちょっとどう言う事さ！！」

ク「答えは俺達Fクラスだ」

明久「ふぇ？」

雄二「・・・クォヴレー、パス」

ク「了解した。現在表に出てる最強戦力は姫路だけだ」

明久「うんうん」

ク「実力は学年次席クラス。体が弱いがこのところすこぶる健康な彼女を牽制する方法は？」

明久「色仕掛け」

ずっこけた。

姫路「よよよよよ吉井君！！おおお怒りますよ！！／／／／／／／／／（吉井君の色仕掛け！？襲って美味しく頂いてからお持ち帰りコースですね！！）」

ク「・・・・・・決定的な弱みを握る事だ。姫路が攻撃を躊躇う程のものをな」

かつて、ザフトと交戦した時、偶然保護したラクス・クラインを利用した事を思い出す。今でも後味が悪い。

ク「今回の襲撃はその事も含んだ事に違いない。結果、俺と言うカードを見られる痛手を負ったが姫路が動ける以上これは脅威だ・・・何故姫路の胸元を凝視する？」

姫路「吉井君！！！！！／／／／／／／／／／／／／／」（手で胸を抑える）

ム「・・・強調されて・・・ブパッ！！」（鼻血）

ク「・・・続けるぞ。姫路の戦力を以ってすれば勝機が俺達にもある。俺達がBクラスに勝てばそのまま俺達に戦争を仕掛ける。ろくに補給もしていない俺達など容易いものだろう」

明久「じゃあBクラスが勝ったら？」

ク「ここである要素が加わる。・・・土屋、確かBクラスの根本とCクラス代表の小山は付き合っているとの噂があったな」

ム「・・・（コクコク）」

明久「何いいいいいい！！おのれ！！許すまじねm「吉井君？」・・・

・すみません」

姫路が笑顔なのにプレッシャーを感じるのは何故だ？

ク「この噂が本当ならBクラスとCクラスは繋がっている筈だ。どちらにせよ、CクラスはBクラスには戦争をけしかけず、銃口を向けるのは俺達の方だけだ」

明久「でも何でそれが罠に関係が？」

ク「Cクラス戦を嫌がる俺達はCクラスと停戦協定を結ぶだろ？」

明久「うん、で、それが？」

ク「この協定を結ぶ事を根本は自分達と結んだ協定違反として戦闘を仕掛けてくる。Cクラス教室でな」

明久「じゃあ、向こうだって協定違反じゃないか！！」

ク「放課後に恋人のクラスで恋人と会話するのが協定違反なのか？」

明久「・・・あ」（大汗）

ク「そう言う事だ」

ふう、なかなか疲れるな。教えると言う事は。

須川「吉井！！島田が捕虜になった！！すぐ来てくれ！！」

明久「なんだって！？すぐに行く！！」

島田が捕虜になったか。まあ、大丈夫だろうな。

雄二「さて、バカが消えた所でクォヴレー」

ク「何だ？」

雄二「Ｃクラス全員相手に何分持つ？」

～ｓｉｄｅ　ｏｕｔ～

～姫路　ｓｉｄｅ～

吉井君たら島田さんが捕まったと聞いて飛んで行ってしまいました。
私が捕まった時も来てくれるんでしょうか？

そんな事を考えていたら坂本君がゴードン君にとんでもない事を聞いていました。

雄二「Ｃクラス全員相手に何分持つ？」

いくらゴードン君が凄いからってそれは・・・

ク「それは俺がか？それともＣクラスがか？」

・・・へ？

雄二「・・・聞かせろ」

ク「木下と島田と吉井を借りる」

え？え？も・・・もしかして倒せるんですか！？

雄二「Ｂクラスはどうなる？」

ク「姫路と土屋で事足りる」

ふぇぇぇぇぇぇぇぇぇ！！？な、何故か倒せる方向で話が進んでます！！

雄二「・・・まあ、予測がついたがそっちはどうなる？」

ク「さっき言った通りの人材を与えてくれるのなら」

ええと、吉井君と島田さんと木下君でしたよね、ああ！！何で私がそっちにいないんですか！！っと、作戦があるんでしたね。落ち着きましょう私。（この間０．７秒）

ク「５分以内に片付ける」

ええええええええええええええええええええええ！！！！！！？

～ｓｉｄｅ　ｏｕｔ～

今は休戦中、明久が島田にコンボで１００００以上ダメージを叩き込む侍が感嘆する程の鬼畜壁ハメドリブルを食らっている頃・・・

～ｉｎ　Ｃクラス～

小山「本当に来るのよね？」

根本「おいおい、信用してくれよ友香。Ｆクラスのクズ共のお味噌ならここに来るのは間違いない」

小山「そこを待ち伏せでしょ？流石ね」

根本「フッ・・・まあな」（右斜め４５度からのアングルでドヤ顔）

コンコン

ク「失礼する。Ｃクラス代表はいるか？」

小山「（聞いた事ない声ね）誰かしら？」

ク「Ｆクラスの使者の者だ」

小山「（知ってるヤツ？）」

根本「（いや、知らん）」

ク「？　　どうかしたか？」

小山「いえ、何でもないわ。入って来て頂戴」

ガラッ

ク「失礼する」

ザワッ！！

C女子「ちょ！！ヤダ！！超イケメンじゃない！！」

C男子「ケッ！！顔が良くても初戦Fクラスだろ」

小山「で、何の用かしら？」

ク「ああ、Fクラスは明日午前9時よりCクラスに試召戦争を申し込む」

Cクラスの時が止まる。

小山「・・・えーと、バカにしてる？」

ク「いたって真面目だ。代表曰く、片手間でも充分倒せるから掛かってこいとの事だ」（さらり）

小山「（プチッ）ふーん、そう、そう言ってたのね」（怒）

ク「それと、時間にこちらの部隊を送り込むので、ガタガタ震えながらお祈りでもしていろと言っていた」（さらり）

小山「（ブチッ）あ～～そう」（怒怒）

ク「倒されるのが怖いなら受けなくてもいいと言っていた」（さｙ）

小山「（ブッチーン）上等よ！！受けてたってやるわ！！あんたが送り込む部隊全滅させて本陣乗り込んで焼き土下座させてやるわ！！」

ク「（焼き土下座？）分かった。伝えておこう。ではな」

ピシャッ

小山「見てらっしゃい！！坂本雄二ーーーーーーー！！」

根本「（坂本のヤツ何考えてやがんだ？あんな奴何時の間にＦクラスに入ったんだ？）」

激戦の予感。

デ「以上ナレーションは私ディス・アストラナガンがお送りしました」

福原「えーーーーー」

終われ！！！！

第七問　Bクラス戦開幕　破（後書き）

なんだこれ？

つーか本編にまで・・・

デ「とうっ」

ザシュザシュザシュザシュザシュザシュザシュザシュ

あ？に？ゃあああああああああああ！！！

デ「後書きも占拠です」ｖ（・―・ｖ）♪

第七問　Bクラス戦開幕　急（前書き）

デ「ちょっとしたお知らせがあります。後書きにてご確認を」

第七問　Bクラス戦開幕　急

～クォヴレー　side～

ＡＭ　８：５０　開戦まであと１０分か。仕込みは万全、回復試験も受けた。後は勝つだけだ。現在Ｃクラスに向かっている所だ。

明久「あ、クォヴレー。何処行ってたの？」

もう三人とも待っていたようだ。

ク「回復試験をな」

秀吉「しかし、本当に四人で勝てるのかのう・・・」

美波「ちょっと木下！！弱気になんないの！！」

ク「今回はツーマンセルを組む。吉井と島田、俺と木下だ」

明久「ねえ、クォヴレー。何で僕らの事苗字で呼ぶのさ？」

ク「？　特に理由は無いが？」

明久「なら僕らの事の名前で呼んでよ。仲間でしょ？」

！！　吉井・・・！！

秀吉「なら、ワシもそうしてもらおうかのう？」

美波「・・・ウチは別に」

ク「・・・ああ、よろしく頼む。明久、島田、秀吉」（ニコッ）

明久「へへっ」（ニカッ）

秀吉「うむ♪」（ニコニコ）

鉄人「準備はいいか？お前等」

西村教諭が来たようだ。これも勝つための布石だ。

明久「げえっ！！鉄人！？」

ク「立会いの教員として俺が申請した。必要なファクターだ」

美波「それってどういう事？」

ク「俺達に有利なフィールドを用意する為だ」

キーンコーンカーンコーン（棒）←ディストラ

今変な声が聞こえたが無視だ。

雄二『お前等！！しっかりお姫様をエスコートしてやれ！！お前等

は今から騎士(ナイト)となって敵陣に突っ込むんだ！！』

『『『『おおおおおーーーーーーーーーーっ！！！！！』』』』

向こうも始まった様だな。

ク「俺達も行くぞ！！」

三人「「「おーーーっ！！」」」

コンコン

ク「失礼する」

ドンガラガッシャーン！！

ズザーーーーッ！！×3

何故か後ろで三人がずっこけた。

ズパーーーン

小山「何で朝っぱらから吉本新喜劇やんなくちゃいけないのよ！！」

何故かは知らんが怒っているようだ。

明久「いや、怒るよそりゃ！！出鼻挫かれたんだもん！！」

ク「ノックをするのがマナーではないのか？」

美波「ねえ、もしかして・・・」

秀吉「うむ・・・」

美&秀「「クォヴレーって超(かの)天然?」」

天然って何だ?

C女子「本物・・・でもそこがイイッ!!」

C女子「か~わ~い~い~♪」

でしょ?byディストラ

って出てくんなお前は!!by作者

~Cクラス　教室~

鉄人「改めて・・・準備はいいか?」

小山「さっさと終わらせるわよ。ま、どの教科でも負ける筈がないのだけど」

ク「では先生、数学のフィールドを」

鉄人「よかろう！！承認！！」

数学のフィールドが展開された。これで舞台は整った。

「「「「「試獣召喚（サモン）！！」」」」」

『Cクラス　小山友香　１３８点』

『Cクラス　平均　１２６点』

小山「もう謝ったって許さないわよ」

腕を組み余裕の表情を浮かべるCクラスの面々。だが、

ク「俺達を・・・」

明久「舐めて掛かると痛い目みるよ！！」

「「「「「試獣召喚（サモン）っ！！」」」」」

『Fクラス　吉井明久　５７点』

『Fクラス　木下秀吉　６５点』

小山「何が痛い目を見せるよ？やっぱりザコはザコ・・・」

『Fクラス　島田美波　１６８点』

小山「・・・え？」

美波「数学だけだったらＢクラス並に取れんのよ！！」

『Ｆクラス　　クォヴレー・ゴードン　　２５６４点』

全員「「「「ちょっと待てぇぇぇぇぇ！！！！！」」」」

小山「おかしいわよ！！四桁なんて有り得ないわ！！」

鉄人「こいつは朝７：０５から数学の回復試験を１００分間受けたんだ。監督者は俺だ（こんな手を使う奴は初めてだがな）」

ク「そう言う事だ。準備は良いか！！」

明久「なんか色々急展開過ぎて思考が追いつかないけど大丈夫！！」

ク「征くぞ！！」

明久「応っ！！」

秀吉「承知！！」

美波「ＯＫ！！」

さあ、五分以内で片付けるぞ！！

ク「テュトラクス・グラマトン・・・　いけ！！ガン・スレイヴ！！」

腕輪の能力を発動し、四体のコウモリを呼び出す。計五門の銃口からの一斉射撃で敵を牽制する。

ク「明久！！島田！！」

美波「オッケー！！行くわよ！！アキ！！」

明久「よっしゃぁ！！任せてよ美波！！」

学ランに木刀を持った明久の召喚獣と軍服にサーベルを持った島田の召喚獣が駆けて行く。卓越した操縦技術で明久の召喚獣が敵に決定的な隙をつくらせ、全力を出せる数学のフィールドで絶好調の島田がサーベルでその敵を尽く斬り伏せていく。

C男子「なんなんだこいつら！？メチャクチャ強えぞ！！」

C男子「銀髪だ！！銀髪を狙え！！」

標的を俺に切り替え、数人が攻撃を仕掛けてくる。

「「「死ねぇぇぇぇぇ！！！！」」」

秀吉「ワシを忘れてはおらんかのう？」

道着に袴を履いた秀吉の召喚獣が薙刀を振るい召喚獣達を斬り飛ばす。そこにガン・スレイヴで追撃、止めを刺す。

秀吉「ちと浅かったようじゃな」

ク「十分だ」

開始から2分17秒、近衛兵を除いて残り二十人。

ク「攻め時だな・・・秀吉！！」

秀吉「うむ！！」

秀吉の召喚獣の側面の死角に一機ずつガン・スレイヴを配置し、共に突っ込んでいく。側面をガン・スレイヴが、背後を俺がカバーし、秀吉が正面を斬り進む。

明久「しまった！！美波」

C男子「分断したぞ！！囲め！！」

美波「・・・ちょっとキツいわね・・・！！」

分断されたか！！

ク「秀吉！！持たせられるか！？」

秀吉「なんとかの！！」

若干強引だがこれで行く！！

ク「明久！！」

ガン・スレイヴを二機、明久の召喚獣の元に飛ばす。それだけで意思を汲み取った明久は召喚獣を跳躍させる。

明久「だらっしゃぁぁぁーーーーっ！！」

明久の召喚獣は見事にガン・スレイヴに着地した。

ク「いくぞ！！」

極限まで集中力を高めた所為で髪が青く染まる。二機のガン・スレイヴを操り島田の召喚獣の元へ運ぶ。

明久「掴まれぇぇぇぇーーーーっ！！」

明久の召喚獣が島田の召喚獣を抱える。そのまま代表の所まで突っ込ませる！！

秀吉「抜かれたじゃと？！クォヴレー！！」

銃剣を展開し、突っ込んできた召喚獣を突き刺す。

ク「悪いが俺は近距離もこなす！！」

召喚獣が消えるのを視界の隅に追いやり、二人の方に意識を向ける。代表を囲む様に守る近衛兵が邪魔だ。

ク「秀吉！！飛ぶぞ！！」

秀吉「おお！？」

明久と同様に俺の召喚獣を二機のガン・スレイヴに乗せ、秀吉の召喚獣を抱える。

ク「高度を上げるぞ！！」

四機のガン・スレイヴをギリギリまで高く上げる。

ク「用意は良いか？三人共！！」

三人「「「応っ！！」」」

その言葉を皮切りに俺を先頭に落ちていく。下では迎撃の為近衛兵が武器を構えるが無意味だ！！

ク「エメト・アッシャー！！ダブルシュート！！」

ガン・スレイヴをすぐにエメト・アッシャーに変更し、撃つ！！下で構えていた近衛兵は避けられず全滅した。

小山「嘘よ！！こんな奴ら相手に負けるなんて！！Fクラスのくせに！！」

秀吉「そのFクラスをうつけ者とぬかしたお主はワシらFクラスが

討ち取る！！」

三人の召喚獣が振りかぶる！！

三人「「「いっけぇぇぇぇぇぇーーーーーーー！！！！」」」

小山「舐めるなぁぁぁぁぁーーーーーー！！」

三人の攻撃をロングソードで受けるも、明久の召喚獣の木刀と共に砕け、残りの二人が腕を斬り落とす。そしてすぐさま離脱する。

小山「くうっ！！」

代表の召喚獣が顔を上げるとそこには、

ク「アキシオン・バスター・・・・」

胸部に巨大な砲門を携えた俺の召喚獣が。

ク「マキシマムシューーーーートッ！！」

発射された強大な一撃はあっという間に召喚獣を飲み込み、

『Cクラス　　小山友香　　0点』

ク「俺達の勝ちだ！！」

開始から3分58秒、俺達の勝利が決まった。

～side　out～

～雄二side～

　なんとかBクラス前まで戦線を押し上げ、近衛兵共と教室に追い込んだ。

雄二「姫路、いけるか？」

姫路「吉井君達だって頑張ってるんです！！いけます！！」

大丈夫そうだな。

雄二「よし！！いくぞ」

Bクラスの教室に一斉に乗り込む。空調の室外機を壊しておいた為窓が開けてある。作戦通り！！

根本「チッ！！お前等！！」

奴の周りの兵隊共が囲んでくる。当然奴の周りには誰も居ない！！

根本「所詮Fクラスだったな。ここまでだ！！」

雄二「今だ！！ムッツリーニ！！」

開け放たれた窓から入ってくるムッツリーニと保体の大島先生。

根本「な、何っ！！」

ム「・・・保健体育勝負。試獣召喚（サモン）」

『Ｆクラス　土屋康太　ｖｓ　Ｂクラス　根本恭二
保健体育　４４１点　ｖｓ　２０３点』

ムッツリーニの召喚獣の一撃で根本の召喚獣は消滅。俺達の勝ちだ！！

って短かったな。

因みにＣクラスに関しては、撮影会の撮影場所の提供でお咎めなしにしたんだが、Ｃクラスを中心にクォヴレーのファンが急増したらしい。小山に撮影会の内容を聞かれたから黙っといた。後々の手札

はバラさない事の限るぜ。

後は・・・Ａクラスだけだ！！

～side　　out～

第七問　Ｂクラス戦開幕　急（後書き）

デ「そろそろハロウィンですね。というわけで、マスターの自宅にてコスプレハロウィンパーティーを開催します。参加ご希望の方は１０／２５までにＳＨＯＷ宛にメッセージを送って下さい。件名は『ハロウィンパーティー参加希望』、本文に『参加者の名前と衣装』書いて送って下さい。先着６名様までです」

作「お一人様６名様まで参加させられます。美味しい料理とお菓子をご用意させて頂きます。どうぞ起こし下さいませ」

協賛　ムッツリ商会

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n9052q/

バカとテストと虚空の使者

2011年10月19日02時14分発行